

# 協働ファシリテーター 実践のしおり

2025年度版





# 目次

はじめに	1
協働のプロセス	2
本紙の読み方	3
ファシリテーターの心がまえ	4
事例紹介 【長門市】団体×行政×学生×企業の協働	5
【周南市】団体×企業の協働	13
【下関市】団体×ボランティア×学校の協働	19
【岩国市】団体×学生・若者・子育て世代・企業の協働	27
古賀桃子さんからのコメント	35
本紙作成にあたっての参考文献・資料 / 付録	37



## はじめに

山口県では、人口減少や少子高齢化の進行、各現場における担い手不足、地域課題の複雑化・多様化など、これまで以上に多くの課題に直面しています。こうした状況の中で、県民活動団体、あるいは行政担当課やコミュニティ組織などが単独で地域課題の解決を図ることは以前にもまして難しくなっています。その点で、地域に関わる多様な主体が力を合わせ、互いの強みを活かしながら課題解決に取り組む「協働」の重要性がなお一層高まっていると思われま

当県では、令和5年度から3年間にわたり「協働ネットワーク強化による県民活動促進事業」を実施し、地域のさまざまな主体が連携しやすい関係づくりと環境整備を進めてまいりました。具体的には、主に県内各地の市民活動支援センターが、地域の課題や活動の実情を身近な立場で把握し、団体・住民・企業・行政など結びつけて対話を促し、協働の芽を育てる存在として、日々実践を重ねています。

本冊子「協働ファシリテーター実践のしおり」は、そうした現場での取組を広く共有し、協働の進め方を具体的にイメージできる参考ツールとして作成するものです。各地で生まれた実践事例には、地域の状況に応じた工夫や試行錯誤、関係づくりの積み重ねが数多く見られます。それらは特別な手法ではなく、地域の中にある人と人とのつながりを大切にしながら、着実に協働を進めてきた歩みそのものです。本冊子が、これから協働に取り組もうとする皆様にとって、身近で実践的な手引きとなることを期待しています。

また、協働は一度の取組で完成するものではなく、対話と信頼関係を重ねながら育っていくものです。本冊子をきっかけに、地域の中で新たな出会いや学びが生まれ、持続可能な活動やネットワークの広がりにつながることを願っております。

# 協働のプロセス

促進・支援するケース

想定されるシチュエーション

一言メモ



1

何かしらの問題・課題があることを知る・把握する  
(組織課題、地域課題など)

- ・相談対応業務で、相談者から直接問題を聞きとる。相談者自身が自覚していない問題を察知する
- ・団体交流会や意見交換会を行う中で問題が見える
- ・地域情報紙などから特定地域の問題状況を知る

協働は「問題・課題解決の手段」と言われるように、まずは解決したい問題・課題の存在やその内容を、日頃の業務を通じてキャッチする。



2

協働の要不要や効果性を吟味・検討する  
→協働という手法が有効かどうか、どういった協働が必要かを確認・検証

- ・個人ワーク、またはセンターの役員や外部の支援者などとの話し合いの中から、問題解決のために「複数の主体による連携協働」が有効かどうかを検討する
- ・課題解決に必要な協働の関係者、または関係者が持つ資源や専門性を想定する

把握した問題への解決には、一定の資源や専門性などが必要と見込んだら、その資源を持つ主体や組織に向けて働きかけてみる。



3

組みたい・関わりたい主体に働きかける

- ・登録団体や業務の関係先で知り合った各主体に対し、協力や参画の呼びかけ(または話合いの設定)をする(→ネゴシエーション)

呼びかける相手に関わってくれる動機を探る。その際に、ネット等で呼びかけ相手の現状や重要視していることなどの情報を仕入れてみる。



4

組みたい・関わりたい主体同士が話し合う場を設ける  
(双方をつなぐ、組み合わせる)

- ・関係者が集う会合や意見交換の中で、ワークショップを交え、各主体の意向や状態を見える化・共有する(→コーディネーション、会議ファシリテーション)

各参加者の強み(提供できる資源、協力できること)各参加者の弱み(不足しているもの・悩みごと)、または、各者のミッションや当年度重要事業などを棚卸しして、「つながり」ポイントを探る。



5

複数の主体の協働による取組みを支援する  
(事業化、事業の進捗管理)

- ・各主体が協働で取り組むプロジェクトに協力者などの立場で参画
- ・MTG会場貸出し、スケジュール管理、議事録作成、情報発信協力、助成金等の情報提供などさまざまな形での実務的な関与がありうる

各主体によって、当たり前で共有されていると考える常識・ルール・マナー・言語・文化が異なる可能性もあり、その齟齬が基で協力関係が破綻するリスク有。それらの齟齬の解消や予防なども重要。



6

協働で実行できた取組みに関して情報を発信・共有する

- ・プロジェクト内部で話し合ったことや実務の進捗状況について情報共有を図るケースもあり
- ・プロジェクトの実施予定事業の広報や、実施した事業内容の報告(情報発信)の協力を行うことも

近年はITツールを活用して関係者内部で情報共有できる手法を活用、またはそれらを紹介することが多い。ただし関係者の性格によってツールの活用にも制限があることも(例:IT苦手な団体)。また、広報のツールやルートの紹介もありうる。

# 本紙の読み方

本紙は、山口県内の各市民活動支援センターで取り組まれた「協働ファシリテーション」(※)の取り組み事例や、そこで見受けられるノウハウを掲載したものです。

(※)本紙では「(協働)ファシリテーション」という言葉を以下のような意味合いで用いています。

**人々が関わり繋がることや、協働による取り組みなどを支援・促進すること**

(参考:徳田太郎・鈴木まり子『ソーシャル・ファシリテーション』)

また、掲載にあたっては「協働ファシリテーションのプロセス」を以下のように掲げ(詳細はp2参照)、このプロセスに応じて複数の事例を紹介しています。



協働を進めるにあたって特定のプロセスに課題や行き詰まりを感じる方は、各事例ページの気になるプロセスの箇所をピックアップしてみる、という読み方もできます。

(たとえば、「各主体に協働を呼びかける時にうまくいかない」と思われる方は、各事例において「協働への声かけ」という項目の記事をチェックする、など)

なお、本紙作成にあたっては特に『くらし×〇〇 つなぎの手帖』(認定特定非営利活動法人日本NPOセンター、特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター)を参考にさせていただきました。本紙の最後には、ふくおかNPOセンター代表の古賀桃子さんから各掲載事例に対していただいたコメントを掲載しています。合わせてご参照いただければと思います。古賀さんには、本紙作成に向けて貴重なご助言やご協力を賜りました。深くお礼申し上げます。



# ファシリテーターの心がまえ

## 「困りごとは身近にある」という気持ちで

困っている人は皆相談するわけでもなく、自分の中に抱え込み目に見えて明らかでないことも多々あります。会話を通じて、相手方にどのような背景があるのか想像をめぐらしましょう。

## 地域のさまざまな動きに関心を

地域課題というものは日々変化を見せています。地域の状況とそれに対する官民の動きには日々アンテナをはっておきましょう。地元紙や行政の発行物、地域福祉計画なども地域の動きを知る参考になります。

## 既存のつながり先や制度について予習を

マッチングやコーディネーションに際しては、当事者に関係する機関との関係づくりや情報共有は不可欠。確認は密にしましょう。自分たちの得意と不得意を把握し、貢献ポイントを見つけ出していきます。制度について調べ、状況を把握しましょう。わからないことはその場で聞きましょう。

## 日頃から、異業種を含む多様なつながりづくりに努めておきましょう

一見、関係ないと思える組織・個人でも、いつ、どこで、どんな活動がパートナーとなりうるのか可能性は想定を超えて広がっていきます。まちづくり・地域づくりに関連する会合には極力顔を出しておきましょう。つながりが多様であるほど、いざという時に大きな宝になります。つながりの持続のためには、SNSも有効です。

(参考資料/認定特定非営利活動法人日本NPOセンター・特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター発行『つなぎの手帳』)



## 心がまえ・番外編



## 雑談力と応用力

協働のつなぎ手としていくつもの実績を持つスーパーファシリテーターが共通して持っているのが、「雑談力」と「応用力」です。

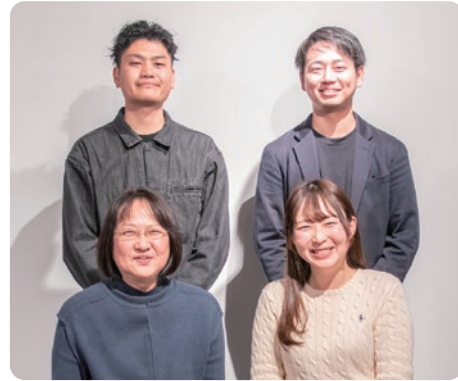
「何か困ることがありますか?」と尋ねるだけでは拾いあげることができない「困りごと」、当事者自身も正確には掴みきれていない「困りごと」は、普段の何気ない雑談の中に隠れている、とスーパーファシリテーターたちは認識しています。そのため、日頃からさまざまな団体とのつながりを持ち、何気なくかわしている会話の中からそうした「困りごと」を見つけだし、解決のための協働へとつなげていくことを大切にしています。

また、「これ、いいな!」と思うような協働の事例に出会ったとき、スーパーファシリテーターたちが考えているのは、「その取り組み、自分たちの地域でも応用して実践できないか」ということです。成功事例との出会いは、新たな協働を思いつく絶好の機会と捉えてほしい、と彼らはいいます。例えば、「内容を変えたら、この県民活動団体とスポーツチームの協働は自分たちもできるな…」「中学校との協働実践だけど、小学校でもできそうだな」等々、「つなげる先」や「つなげる視点」を自分の地域の現状に合うよう少しだけ変えて応用すれば、地元で必要とされている協働に生まれ変わらせることができるから、と。最後に、「協働の声かけは、ダメもと…の精神で。もし断られても、それは新たなチャレンジへと方向転換する良い機会だと捉えればいだけ」というアドバイスも。

「雑談力」と「応用力」を鍛えてつなぎ手の能力を伸ばし、スーパーファシリテーターを目指しましょう!!

話し合いを重ねて得意技を組み合わせる

大津緑洋高校 × 企業 × 社会福祉協議会 × 市民活動団体



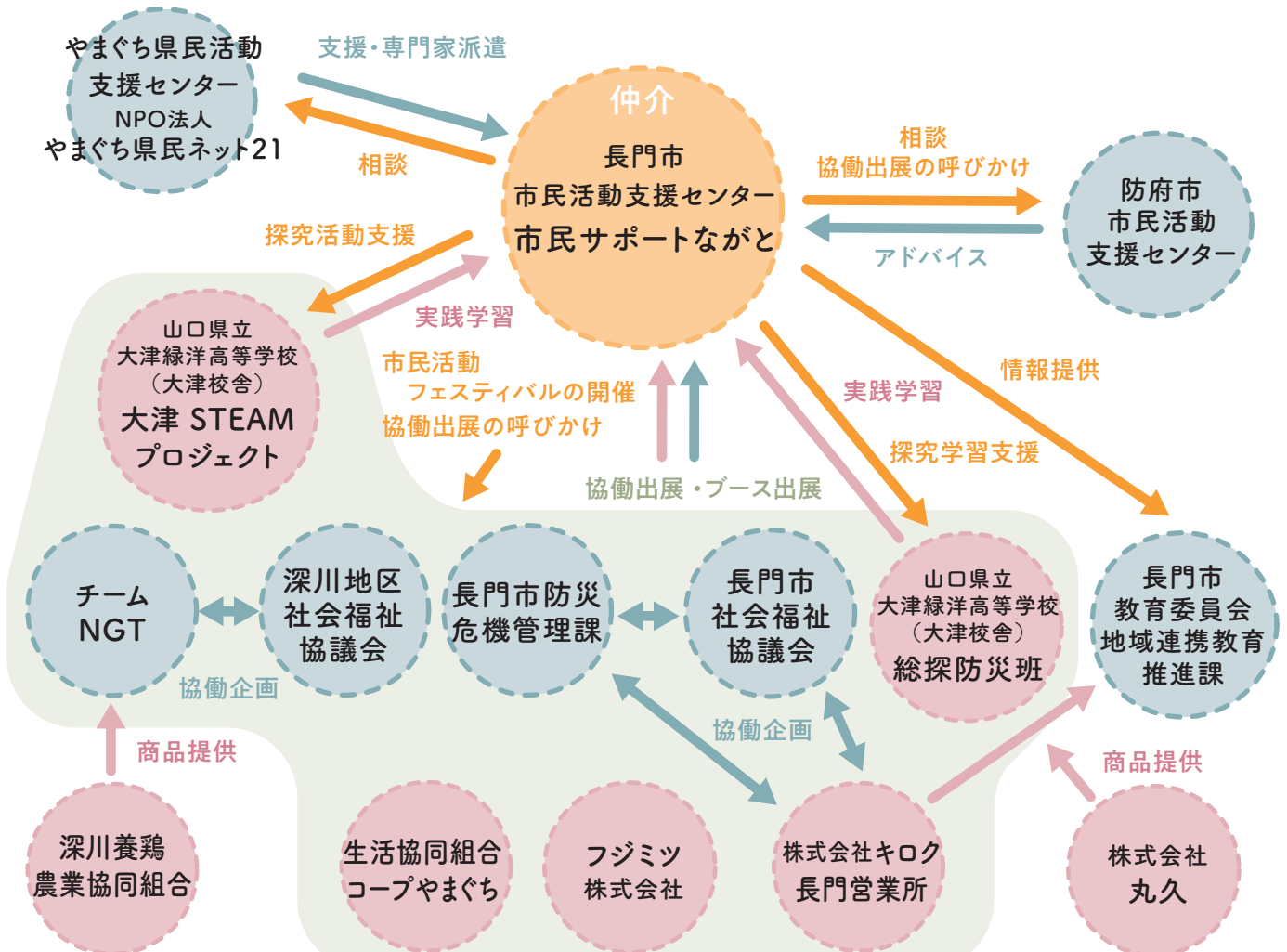
協働の概要

災害がおこった時、多様な団体がすぐに協力しあえる関係性を構築すること、また市民の防災意識の向上を目指して、主催イベント「市民活動フェスティバル2025」の中で「防災と共助」をテーマに掲げたイベントを協働で実施した。その中で、市民活動支援センターが防災に関わる活動をしている市民活動団体や企業、組織、学生などに声をかけた。

長門市市民活動支援センター 市民サポートながと

中間支援組織として、「市民が主役 協働による持続可能なまちづくり」を目指し、長門市民を対象に講演会や各種講座、イベントなどを定期的で開催し、InstagramなどのSNSも活用して市民活動支援センターの活動の周知を図っている。市民活動団体や行政、社会福祉協議会などと幅広く協働し、社会課題の解決の支援を行うとともに、地域に積極的に入っていき地域課題の解決や地域のコミュニティ活動の支援にも注力している。公設公営での2年を経て2025年春に民営化。

登録団体:31団体(2026年3月現在)



## きっかけ

### 2024年に開催した「市民活動フェスティバル」での協働

市民活動支援センターの利用促進を図るため、センターのオープン告知も兼ね、地元の市民活動団体が交流するイベントを開催。

#### つなぎでのヒント



市民活動支援センター  
専門員  
杉山 裕絵 さん

2024年秋に開催した市民活動フェスティバルの中で、子ども真ん中ネットワークさんと株式会社キロク長門営業所さん、2つの団体で防災をテーマに協働でオリジナルのワークショップや防災用品の展示などの出展をしていただきました。センターとしては初の協働案件でしたが、協働された団体の方、ワークショップに参加された方、そしてフェスティバルの来場者にもとても好評でした。

市民活動フェスティバルの開催にあたっては、協働した2団体以外にも多くの団体のご協力を得ることができました。しかし、センターとして団体同士の横の繋がりを作る支援が十分にできず、結果として、参加していただいた団体同士がお互いに何をしているのかよくわかっていない状況だったという反省点がありました。

## 困りごとの発見

前回のフェスティバルで感じた、中間支援組織としては力不足だったという反省点と、来年もまた協働で何か取り組みたいという前向きな思いから、2025年に開催する市民活動フェスティバルを、「防災」をテーマに多様な団体が関わり協働する場にしたいと考える。

#### つなぎでのヒント



フェスティバルで、参加する団体同士がお互いの活動を知って新たにつなぎ協力関係を築くきっかけをつくり、今回の協働をきっかけに実際に災害が起こったときにすぐに協力しあえる関係性を構築することを最終的な目標にできればと思いました。

今回のフェスティバルに参加した団体さんだけでなく、新たな団体さんが「次回は自分たちも参加したい。出展してみたい」「ボランティアしてみたい」と思ってもらえるようなイベントにして、今後も協働の広がりをつくっていけるようになればという思いもありました。

#### つなぎでのヒント



協働のテーマを「防災」にしたのは、市民の防災意識がまだまだ低いということがわかり、長門市は大規模災害の経験がありませんが、災害はいつでも起こるかわからないので市民の防災に対する意識を少しでも高めたいという思いがありました。

防災をテーマにした協働事業でパネル展示や体験ブース、教室・講座などを行い、防災って何をしたいのかよく分からないという市民に「知る。関わる。学べる」機会を提供できれば、防災に対する意識づけができるのではと考えました。

## つなぎ先・つなぐ視点

センターは、「市民活動フェスティバル2025」のテーマを「防災と共助」と定め、収集してきた情報をもとに、今まで関係を築いてきた団体に加え、新たにつなぐ協働先として巻き込みたい団体をピックアップしていく。

#### つなぎでのヒント



2024年のフェスティバルでは、事前の情報収集が不十分で2団体しか協働につなげられなかったというのが大きな反省点でした。2025年は早い時期から防災の取り組みをおこなっている団体の情報をとにかくたくさん集め、つなぎ先候補をピックアップしていきました。

長門市には大学、専門学校がありません。未来を担う若者を市民活動に巻き込むには、高校生の参画が欠かせないと考えていました。

## つなぎ先・つなぐ視点

### つなぎでのヒント

センターで考えた以下のような目的や狙いから、各団体をピックアップしました。



市民活動支援センター  
専門員  
杉山 裕絵 さん

- ① 山口県立大津緑洋高等学校(大津校舎)  
1年 総合的な探究の時間『長門学』  
まちづくり×防災チーム班 (以後、総探防災班)

市民活動支援センターが探究学習の支援を行っている他市の事例を知り、うちのセンターでもと思い立ちました。まずはセンター活動のアウトリーチからと2025年の夏頃に大津緑洋高校を訪れました。まずこちらの活動内容を紹介し、高校からは地域貢献プロジェクトや総合的な探究の時間(総探)の情報をもって、センターでできる支援の情報提供をすることで高校とつながることができました。

その流れで大津緑洋高校の総探の支援をセンターがさせていただくことになり、高校生がチームで「国際交流」や「コミュニティ」など多様なテーマで探究学習に取り組んでいることを知りました。その中の一つに「防災」に取り組むチームがあり、お弁当容器を使った防災学習のためのすばらしいツールを作っておられました。フェスティバルはそれを広く市民に知ってもらいたい機会になるのではと考えました。

- ② 山口県立大津緑洋高等学校(大津校舎)  
大津 STEAMプロジェクト

「大好きな地元長門を盛り上げたい!」という熱い想いを持つ大津緑洋高校の高校生たちが市民活動団体として当センターに登録し、「春会」など自主企画のイベントの開催や地元企業とのコラボなどの地域活動に取り組んでいました。そこで、高校生にもフェスティバルに参加してもらって、一緒に盛り上げてもらえたらいいなと思いました。

- ③ チームNGT

長門市の農林水産物をつかったご当地グルメを開発したり、市内の企業さんとつながりながら商品開発をして、イベント時には長門の鶏を使った唐揚げやラーメンといったオリジナルメニューの屋台を出展して地域を盛りあげようという市民活動団体です。フェスティバルでは防災ツールの一つとして炊き出しも予定していましたので、協働ができるのではと考えました。

- ④ 株式会社キロク 長門営業所  
⑤ 生活協働組合コープ山口  
⑥ 株式会社丸久・深川養鶏農業協同組合  
⑦ フジミツ株式会社

防災に取り組む団体の情報収集をする中で、広報誌や普段のお付き合いなどを通じて企業CSRで「防災」を掲げ、防災を意識した取り組みをしている企業が地元にあることを知りました。

- ⑧ 長門市社会福祉協議会(長門市社協)

社会福祉協議会は社会課題の解決を行う組織で、災害時の被災者支援に欠かせない存在です。そこで、フェスティバルは、災害時における社会福祉協議会の役割を広く市民に知っていただくよい機会になるのではと考えました。

長門市社協さんとは昨年度初めて協働し、次回はぜひ企画段階から参加させてほしいとのお声もいただいています。

- ⑨ 深川地区社会福祉協議会

「SDGsマルシェ」や防災の啓発活動にも力を入れておられたので、そのノウハウを参考にさせていただきたいと考えました。また、参加される他の団体さんと連携することで関係性の拡大を図っていただけるのではと思いました。

- ⑩ 防府市市民活動支援センター

センター同士で協働できたらいいねという話を常々していて、どういう形で協働できるかを探っていました。防府のセンターではすでに防災のイベントを開催しておられたので、そのノウハウを教えていただいたり、今回のフェスティバルへのアドバイスがいただけるのではと思いました。

## 協働への声かけ

防災をキーワードにつなぎ先としてピックアップした団体に、フェスティバルでの協働について説明し、参画してもらえるよう声をかけていく。

それぞれ快諾を得る

### つなぎでのヒント



フェスティバルは当初2025年秋の開催予定でしたが、隣接する長門市中央交流プラザの講堂改修の関係で「長門市中央交流プラザまつり」と同時開催することが決まり、開催が2026年3月にズレました。それで少し余裕ができたので、企画をしっかりと練ってお声かけしていったら、参加してくださる団体がどんどん増えていきました。何より高校生が入ってきてくれたことがよかったです。

## 協働への声かけ

### ① 大津緑洋高校(大津校舎) 総探防災班

つながりてコメント



大津緑洋高校  
白木 沙和 さん

私たちは、長門市民の防災意識を高めたいという思いで活動しています。12月に仙崎小学校で防災教室をして、実施前には避難所までの経路を知っている児童が3割だったものの、実施後は8割に大幅に改善しました。この経験から、長門市のより多くの市民の方々にも避難所までの経路について考えてもらい防災意識を高めてほしいなと思い、参加することを決めました。

### ② 大津 STEAMプロジェクト

つながりてコメント



大津緑洋高校  
泉 香帆 さん

今回は自分たちだけでなく、長門の大人の方々と実際につながり、もっと長門を盛り上げるために協働しながら何かできないかと思って、参加することにしました。

何度か私たち高校生が主体となってゼロからイベントを企画していましたが、集客が見込めなかったり、赤字が出たりと、自主イベント開催の難しさに直面していました。効果的な広報やイベントの運営方法などを学ばせていただき、自走するためのスキルアップを図りたいという思いもありました。

### ④ 株式会社キロク

つながりてコメント



株式会社キロク  
長門営業所 所長  
上岡 大輔 さん

会社として、イベントを通じて市民に防災意識を高めてもらうお手伝いをしています。フェスティバルでは長門市民の皆さんの防災意識を高めるお手伝いができるし、災害時に実際に弊社が行っていることや担う役割を知ってもらうよい機会だと思い、昨年に続き今年も参加することにしました。

災害時や復旧時に役立つ重機や福祉機器などを扱う会社なので、災害現場の実情を伝えたり災害時に弊社が担う役割を紹介する良い機会でもあると考えました。

### ⑤ 生活協同組合コープやまぐち

つながりてコメント



生活協同組合  
コープやまぐち  
杉山 稔幸 さん

昨年参加し、今年も声をかけていただいたので。今年のテーマは「防災と共助」。うちも近年防災の取り組みに力を入れているので、何か発信できることがあればと思い参加することにしました。

地域の方と密に関わって、一緒に防災意識の向上に努められたらとも思いました。

### ⑧ 長門市社会福祉協議会(長門市社協)

つながりてコメント



長門市  
社会福祉協議会  
藤田 勝志 さん

今回は市民活動団体との協働ということで、多職種連携のよい機会だと思い参加を決めました。市内では地域活動の担い手の減少や機会の減少ということが起こっています。多職種連携の協働はそれらの課題の解決へのよき手立てとなると思えました。

活動団体がそれぞれの強みをしっかり持って相互が連携できるような仕組みにつながれば、参加者同士の顔の見える関係性につながっていくのではないかなとも思いました。

つながりてのヒント



市民活動支援センター  
専門員  
杉山 裕絵 さん

情報収集していく中で、企業さんも防災をテーマにしたCSR活動の中で、それぞれ課題感を持っているということを知ったので、個別にどんどんお声かけをして連携協力や協働をお願いしていきました。

### ⑨ 深川地区社会福祉協議会(深川地区社協)

つながりてコメント



深川地区  
社会福祉協議会  
上田 幸子 さん

私たち地区社協の今年の大きなテーマは「防災と資源の有効活用」。市民の中では長門市は災害が起こらないというような感じになっているので、その防災意識を少しずつ変えていくことは大切だと思い、防災の啓発活動に力をいれています。また、不要なものを必要な人に譲る防災寄りの「SDGs マルシェ」というイベントを年に2回やっています。

「防災と共助」がテーマのフェスティバルには、同じような目的があると考え参加を決めました。

市民活動フェスティバルは、地域が活性化するととてもいい集いの場。この地域にいるいろいろな人が参加して、連携やネットワークができるような効果があると一番いいですね。

### ⑩ 防府市市民活動支援センター

つながりてコメント



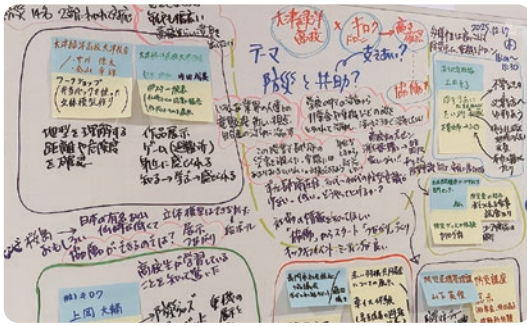
防府市  
市民活動支援センター  
山野 悦子 さん

防災というテーマで協働のお声がけをいただき、防府市防災士連絡協議会という当センターの登録団体もご一緒させていただく機会を得たので参加させていただきました。何か長門市のセンターさんのお力になれることがあればうれしいです。

市民活動センターは市民の皆さんのつなぎ役という立場の中間支援組織です。今回の協働に参加される団体や長門市の方々これからどのような形でつながれるかは分かりませんが、しっかりとつながって有事の際にはすぐに連絡とれるぐらいの連携がとれたらいいと思っています。

# 協働のステップ

## Step 1 つなぐ場の設定



2025年12月18日

**キックオフミーティング**（全体ミーティング1回目）  
センターからフェスティバルの全体説明を行い、参加団体がそれぞれの立場で実施したいこと、協働で取り組みそうなことを話し合った。

2026年1月22日

**全体確認ミーティング**（全体ミーティング2回目）  
フェスティバルでの協働イベントの実施に向け、各団体が具体化した企画内容をプレゼン。情報を共有し、役割分担や会場レイアウト、イベント時の動線など実際の運営に必要な細かな内容の打ち合わせを行った。



2026年2月3日

**個別ミーティング**（ワークショップの企画会議/参加3団体）



### つなぎでのヒント



市民活動支援センター  
専門員  
杉山 裕絵 さん

昨年できなかった「団体同士の横のつながり」をつくるために、参加団体がお互いを知り、企画段階から意見交換しながら共通の目的をもって取り組めるよう、参加者の全体ミーティングを2回セッティングすることにしました。

### つなぎでのヒント



参加する多様な団体が、共通の目的を持って協働できるよう、NPO法人やまぐち県民ネット21にファシリテーターの派遣をお願いしてワークショップを行いました。

このミーティングで、高校生の団体と大人の団体が初めて意見交換をしたのですが、高校生が本当に素晴らしいプレゼンをしてきて、大人側は皆感銘を受けていました。フェスティバルでの協働に向けてとてもよいモチベーションになったと思います。

### つなぎでのヒント



2回目の全体ミーティングでも、NPO法人やまぐち県民ネット21にファシリテーターの派遣をお願いしてワークショップを行い、イベント実施まで全員が情報を共有し同じ目的を持って本番が迎えられるよう意思の統一を図りました。

全体ミーティングでのプレゼンのために各団体が自分たちの言葉で企画内容を言語化すること、お互いの企画内容をヒアリングして情報共有することによって、団体同士の横のつながりが生まれ、協働に対する意識がより高まっていくように感じました。

### つなぎでのヒント



深川地区社協さんの発案でオリジナルのワークショップをやることになったので、担当団体である地区社協さん、キロク長門営業所さん、長門市防災危機管理課とセンターでその内容を考える企画会議を行いました。

でき上がった企画は、来場者にできるだけ会場内を回ってもらうようにするため、トイレカーなど展示されている防災品の中や展示パネルの中に防災に関するキーワードを隠し、それを見つけて集めていく「防災キーワード探し」というスタンプラリーをすることになりました。

その前の全体ミーティングでもそうだったのですが、とにかく皆さんの中からやりたいことやアイデアがどんどん出てくるのです。協働に真摯に取り組み、力をいれていらっしゃるのが伝わってきました。団体同士の横のつながりもできているのが伝わり、主催者側としてとてもありがたいと思いました。

## 協働のステップ

2026年1月19日・2月2日・3月3日  
個別ミーティング（進捗確認と広報戦略会議）



Step 2 企画内容の詳細化・進捗管理  
2025年12月～2026年1月  
企画内容の詳細化

Step 3 それぞれの強みを活かしながら  
共通の目的に向かって協力しあう

### ① 大津緑洋高校(大津校舎) 総探防災班

つながりコメント



大津緑洋高校  
白木 沙和 さん

まず、意外と知られていない長門市のハザードマップのweb版を紹介したいと考えています。例えば、避難所をタップすると住所や電話番号、対応する災害内容が表示されるといった使い方を紹介し、実際に災害が起きた時に、webハザードマップを活用しながら、素早く対応できるようになってもらいたいと思っています。

もう一つ、適切な避難を考えるワークショップをします。高潮と土砂災害、同時に起きて、観光客を道の駅センザキッチンから誘導するという設定で参加者に避難経路を考えてもらうという内容です。距離感や危険度を視覚的にわかりやすく認知できるように、自分たちがお弁当容器を使って作った立体模型を活用します。



避難経路地図の模型



炊き出し

つながりでのヒント



市民活動支援センター  
専門員  
杉山 裕絵 さん

センターと大津STEAMプロジェクトで、各団体の進捗状況確認とイベント全体の進捗確認のためのミーティングを3回行いました。

大津STEAMプロジェクトの参加理由に、出店だけでなく広報やイベント運営について学び、スキルアップしたいという希望がありました。そこで、出展者への呼びかけや広報、イベントの空間クリエイイトなどを依頼してセンターと一緒に運営サイドとしても関わってもらうことにしました。

つながりでのヒント



1回目の全体ミーティング終了後、参加希望の団体にやりたいことをまとめた企画書を提出していただきました。あわせて、各団体に対し2回目の全体ミーティングまでにフェスティバルでやりたいことを具体化したもの、体験や展示内容の詳細企画を作っていただくようお願いしました。

事業の進捗管理や団体との情報共有については、メール等を使って適宜行いました。

大津STEAMプロジェクトさんには、団体への情報発信や連絡等を手伝ってもらいました。

### ② 大津 STEAMプロジェクト

つながりコメント



大津緑洋高校  
泉 香帆 さん

ブース出展、広報、イベント全体のお手伝いという3つの分野で参加します。

ブース出展では、長門市ゆかりの素材を使い、参加者がイベント後も長門市に思いをはせられる小物づくりの場を提供します。

私たちの公式Instagramで色々な広報活動をするもこれまでのイベントでは、集客がなかなか伸びないという課題を抱えていました。運営のお手伝いをしながら効果的な広報の方法を学んで、よりにぎわうイベントづくりに役立てたいです。

### ③ チームNGT・深川養鶏農業協働組合

つながりでのヒント



イベント内で、災害時の炊き出し実演ブースを設けたいと考えていたので、炊き出し経験をお持ちのチームNGTと地区社協さんをお願いしたところ、快く受けてくださいました。今回ブース出展はされていないのですが、深川養鶏農業協働組合さんが、この炊き出しの材料として鶏だんごを提供するという形で協力してくださいました。

#### ④ 株式会社キロク

つながりてコメント



株式会社キロク  
長門営業所 所長  
上岡 大輔 さん

昨年のフェスティバルの協働の経験から、次回やりたいことが見えていました。まず弊社の専門分野である重機のシミュレーターを出展します。来場者に安全に体験してもらうことで、封鎖された道路を開けたり土砂崩れ現場を補強したり、災害現場で実際に重機がどう使われているか、関係者がどう協力しあっているかを周知したいと考えています。

軽トラサイズで下水のマンホールに直結して使える最新のトイレカーも展示して見ていただけます。これは避難時になくしてはならない設備です。

ペット用の防災バックやA4の半分くらいのサイズで車載専用のコンパクトな防災対応バック、炊き出しに必要な防災用品といった食に関するものなど、普段あまり目にする機会がない防災用品なども展示してみてもらおうと考えています。



#### ⑧ 長門市社会福祉協議会

つながりてコメント



長門市  
社会福祉協議会  
藤田 勝志 さん

企画は3つ。まず、災害発生時における車椅子誘導方法の体験コーナーを設けます。市内の社会福祉法人の介護職や専門職の力を借りて、どんな形で車椅子を誘導したらスムーズに避難ができるか、普段使い慣れていないとわからないところや難しいところを学んでもらって、今後に活かしてもらえようという体験ができればいいと考えています。

2つ目。災害発生時に大きな被災者支援につながる赤い羽根共同募金の災害義援金について、パネル展示等で紹介します。義援金がどう使われているかを市民の皆さんにしっかり知っていただき、募金に協力していただくという形につながってほしいと考えています。

3つ目。被災者支援の組織として社会福祉協議会には「災害ボランティアセンター」を運営する役割があります。長門市ではまだ立ち上げの経験がありませんので、災害ボランティアセンターの役割や運営方法について展示を通じて地域の皆さんにお伝えできればいいと考えています。

今回のイベントでは、社協も含め市内の社会福祉法人で結成している「ながと社福サポート」という地域公益活動推進協議会との連携を考えていて、マンパワーや財政的な部分をここでフォローできるのではと考えています。

#### ⑤ 生活協同組合コープやまぐち

つながりてコメント



生活協同組合  
コープやまぐち  
杉山 稔幸 さん

私たちが防災に関して提供できるものといえば、ローリングストックや備蓄品、配布カタログ等に乗っている防災グッズなどです。「食べることはライフラインですが、備蓄食といってもまだまだ一般にはピンとこないところもあると思うので、そういったものを展示して、一緒に楽しみながら学べるブースにしたいです。

#### ⑥ 株式会社丸久

#### ⑦ フジミツ株式会社

つながりてのヒント



丸久さんは、ブース出展はないのですが、防災協定で長門市と連携しているということで、長期保存が可能な防災食の羊羹を無償で提供いただけることになりました。これは、イベント内の体験コーナーの賞品として活用させていただくことにしました。

フジミツ株式会社さんは、能登半島地震の際に被災後すぐにレトルトのおでんを提供されました。今回はそのレトルトおでんを、市価より少し安く販売していただくブースを協力出展という形で出させていただくことになりました。

#### ⑨ 深川地区社会福祉協議会

つながりてコメント



深川地区  
社会福祉協議会  
上田 幸子 さん

フェスティバルでは、チームNGTさんと協働で炊き出しの実演をします。

防災体験って何となくおもしろくなさそうと思われて、イベント会場でなかなか参加者があつまらないことがよくあります。だから今回は、何か楽しく防災体験してもらえようというワークショップを、参加団体に協働して作りませんかとこちらから提案し、うちとキロクさんと長門市防災危機管理課さんとでスタンプラリーを協働実施することになりました。それは、防災関連の出展ブースを回ってもらって、その中に隠されている防災に関するキーワードを見つけて集めていく「防災キーワード探し」というスタンプラリーを実施します。



#### ⑩ 防府市市民活動支援センター

つながりてコメント



防府市  
市民活動支援センター  
山野 悦子 さん

私たちは防災教室の講座を担当するのですが、その中で子どもを対象とした「防災クイズ」のワークショップをします。気軽に参加して、一緒に防災について楽しく学んで考えていただけたらいいなと思っています。

## 協働の広がり

### つながりのヒント



市民活動支援センター  
専門員  
杉山 裕絵 さん

フェスティバルでの協働にむけて意見交換を行う中で、今まではつながるきっかけがなかった団体同士に新たなつながりができて、フェスティバル以外にも協働しようという動きや協働にむけての連携が生まれています。

深川地区社協さんは、今回の協働で生活協同組合コープやまぐちさん、株式会社キロクさんと繋がりができ、「ぜひ、うちのイベントにきてください」とお声がけされています。

今回、市社協さんとセンターが防災でつながったので、今後、災害ボランティアセンターを立ち上げられるようなことがあれば、センターが市民活動団体や地域コミュニティなどの情報提供を行い、連携・協働できると思っています。



市民活動支援センター  
センター長  
久保田 啓子 さん

私は、長門市市民活動支援センターと長門市教育委員会の両方に席があり、教育委員会では家庭教育を担当し、市内小中学校の保護者を対象に、家庭教育学級合同研修を実施しています。今回、フェスティバルに向けての意見交換に参加したことで、キロクさんが防災について幅広い知識とノウハウをもっておられることを知り、2026年1月25日に開催した研修会に、防災グッズの説明や災害対応、また避難所体験ブースの設置などご協力をお願いしました。そして参加者からも大変好評でした。今後は新たに生まれたこの協働を、地域や学校にも広めていきたいと思っています。

### 2026年3月22日

「長門市中央交流プラザまつり」×「市民活動フェスティバル2025」が開催され、多様な団体が協働でつくりあげた「防災と共助」をテーマにしたさまざまなイベントが実施された。

来場者は当初の予定を越える約2000人。協働の目標としていた有事における団体同士の関係性の構築と、市民の防災意識の向上が達成された。



## 協働を終えて・・・

### 長門市市民活動支援センター

イベントを通じて、多様な主体がそれぞれの強みを持ち寄って関わることで、新たなつながりや協力の輪が広がりました。企画段階からの対話を通して相互理解が深まり、団体同士の連携が生まれたことは、大きな成果であったと感じています。ご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。今回の協働をきっかけに、今後もゆるやかに継続的なつながりが広がっていくよう、引き続き支援してまいります。

### 大津緑洋高校(大津校舎) 総探防災班

当日のワークショップには老若男女問わず多くの方に参加いただき、私たちにとっても貴重な体験となりました。防災をもっと身近に感じられる、そして楽しく学ぶことができる活動を、今後も続けていきます。

### 大津 STEAMプロジェクト

市民活動フェスティバルへの参加で、スチプロの活動の幅が広がりました。一方で集客不足や赤字が課題です。「誰のために、何をするか」を明確に、集客性と満足度の高いイベントづくりに挑戦していきます。

### 長門市社会福祉協議会

今回企画から活動まで、多種多様な地域活動団体が、それぞれの強みを発揮し、相互理解を図ることができ、「カタチづくり」のための「パーツ」を集めるきっかけになったと感じます。

### 株式会社キロク 長門営業所

ひとつの目的に向けて、多様な主体との交流・連携を図ることができ、社内での取り組みを幅広い層に認知いただく有意義な機会となりました。また、高校生たちが積極的に活動をしている姿から、多くの示唆と刺激を得ることができました。

### 生活協同組合コープやまぐち

「遊んで学ぼう」をテーマに、クイズを通じて地域の方と楽しく防災意識を高めることができました。今回のイベントで学んだ知識、経験を業務に活かして、長門市の防災意識の向上に努めていきたいと思えます。

### 深川地区社会福祉協議会

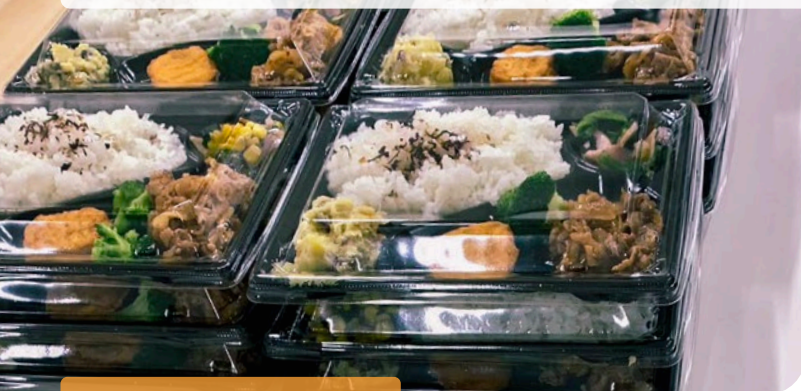
防災をテーマにそれぞれの団体が主体的にどのようにイベントに取り組むかを話し合い、団体の強みを活かし、成果を実感しました。実際の災害時にも瞬時に協働と連携ができる顔見知りの関係となりました。

### 防府市市民活動支援センター

防府市の佐波地域防災士連絡協議会の防災士さんと一緒に防災クイズを行いました。園児たちや小学生を中心に、クイズを通して子どもから大人まで一緒に災害時を考える機会を持てることは大切なことだと思えました。

## お互いを知り、無理のない範囲で長続きする協働を

## 周南ちるちあネット(周南圏域子ども応援連絡協議会) × 株式会社ブンシジャパン



## 協働の概要

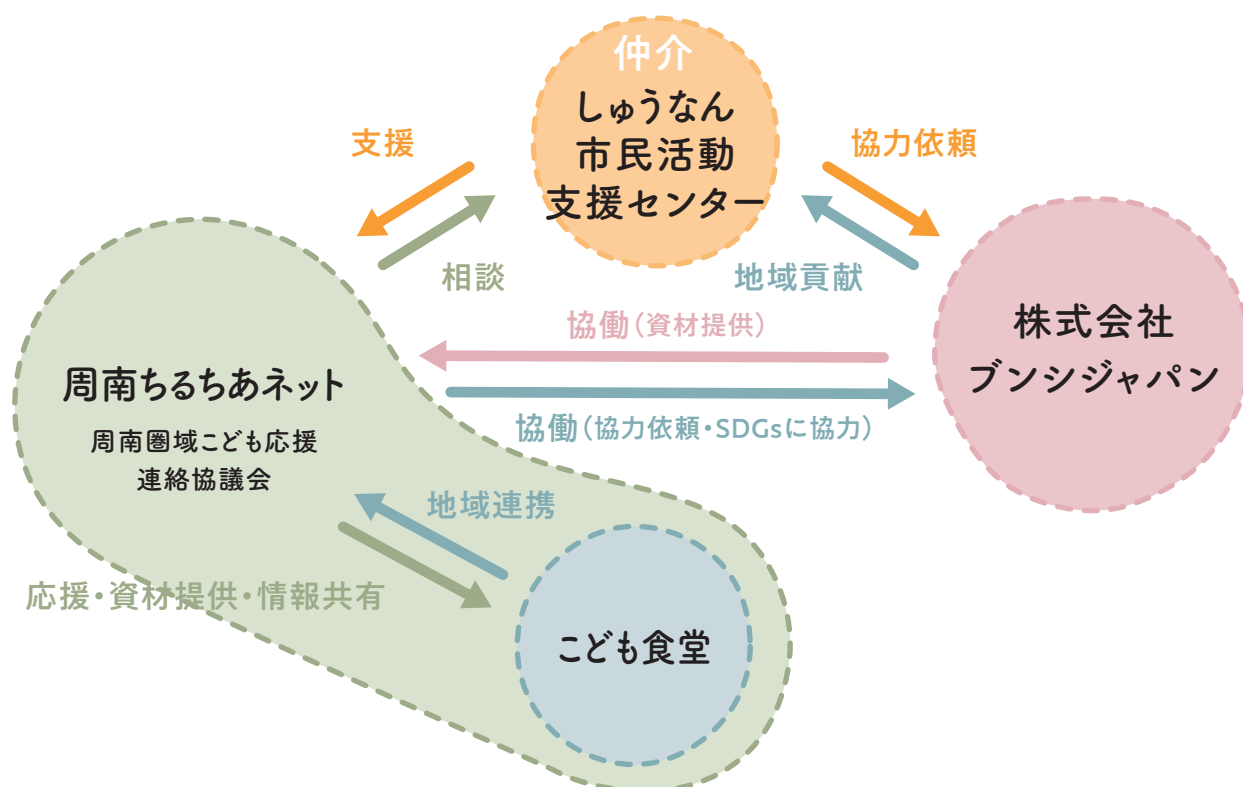
周南地域の子ども食堂を中心とした、こどもの育ちの応援ネットワーク組織「周南ちるちあネット」と、包装資材を取り扱う「株式会社ブンシジャパン」とがつながり、廃棄予定の弁当容器を子ども食堂の有用品として活用する協働を実践



## しゅうなん市民活動支援センター

2001年、市民の非営利で自主的な公益活動への支援を通じて、周南市における市民活動を推進し市民交流を促進することを目的に、JR徳山駅内にある「市民交流センター」に周南市が開設。2023年4月に徳山港町庁舎へ移転。運営主体が周南市から公益財団法人周南市ふるさと振興財団に移行した。「わたしたちのまちをもっと元気にしたい」そんな市民一人ひとりの思いや夢を実現するための拠点施設として、気軽に市民活動に参加したり活発に活動ができるような環境づくりに努めている。

登録団体:266団体(2026年3月現在)



## 周南ちるちあネット(周南圏域子ども応援連絡協議会)

周南圏域における子ども応援活動、居場所作り活動、子ども食堂事業に関わる諸団体が連携し、地域全体での情報共有と協力・支援体制の充実を図ることを目的に、2019年に設立。新規子ども食堂設置団体の設立支援、フードドライブの実施・協力の呼びかけ、地域連携から災害ネットワークへの展開、各種講習会、交流会の開催などの活動を行っている。

## 株式会社ブンシジャパン

会社創立は1957年。1982年に法人化。周南市にて、食品工場向け洗浄・衛生機械の開発・製造・販売、一般包装資材・食品容器・フィルム包装など各種包装資材の企画・製造・販売、食品パッケージの企画・デザイン、ISOやHACCP等取得支援などの食品衛生コンサルティングなどを手がける。顧客の課題を真摯に受け止め、解決と成果を実現することをモットーとしている。

## きっかけ

### 2024年の秋に周南市内の子ども食堂を訪れたある人の気づきがきっかけに

はじめは、しゅうなん市民活動支援センターの運営母体である公益財団法人周南市ふるさと振興財団の船崎理事が市内の子ども食堂を訪れたときに目にした光景でした。その時の話がしゅうなん市民活動支援センターに伝えられます。

#### つながりのヒント



しゅうなん市民活動支援センター事務局長  
竹内 裕光 さん

船崎理事から、「私、子ども食堂を訪問した時にふと気づいたことがあったんだけど」と、ある話を聞いたのです。

子ども食堂でいろいろなボランティアさんが食事を作ったり子どもたちの勉強の居場所づくりをされている中、「今日は早く帰らなくてはいけないから食事を持って帰りたい」と言っている高校生を見かけた、と。そうしたら子ども食堂のスタッフさんが「じゃあ、その容器に詰めて持って帰ってね」と声をかけて、高校生は使い捨てのお弁当容器に食事を詰めて早々に帰っていったそうなのです。

その時に理事は、「子ども食堂は来た人が食卓を囲んで会食するところと思ってたけど、利用者の事情に寄り添ってテイクアウトでも提供するのなら、持ち帰り用のお弁当容器などはどうやって調達しているんだろう」と、疑問に思ったそうなのです。

## 困りごとの発見

その疑問の中に、今回の協働につながる困りごとがあった。

#### つながりコメント



周南ちるちあネット事務局長  
原田 宗隆 さん

コロナ禍で、多くの子ども食堂が会食をテイクアウト方式に変えました。コロナ禍が終わり、「やっぱり子ども食堂はコミュニティの場としての役割が大事だね」とまた会食に戻したところもあるのですが、100食とか200食とか大量に作っている食堂では今もテイクアウト方式にしているところが多いです。そういう食堂は毎回大量の包材の購入が必要で大変ですし、会食方式でやってる食堂でも使い捨ての容器を食器として使っているところがあって、同じように包材を購入しているのです。

昨今の物価高騰のあおりを受け、食材はもちろんですが包材の値段も上がってきていて、費用負担は大きくなる一方。どこの子ども食堂も運営が大変になってきています。

#### つながりのヒント



子ども食堂からは、「容器は購入しています」と聞いた理事は、「洗って何度も使える食器ではなくワンウェイの使い捨て容器を使うと、購入費用の負担がばかにならないんじゃないかと思った」と。

確かに私たちも、子ども食堂はボランティアの皆さんによる運営で利用者負担は低料金が無料、食材はフードバンクや企業からの寄付があったりもするけど、足りない時は運営している人たちの持ち出しになることもあると聞いています。

ギリギリか赤字になるような運営費でやっているところも少なくないのに、絶対に必要な食材に加え、弁当容器などの包材まで購入しなければならないのは大変。きっと、困っておられるところもあるんじゃないかな、と理事と話をしたのです。

## つながり先・つなぐ視点

この課題解決のために理事が思いついたつながり先は、周南市内で食品容器などの包装資材の卸をしている企業でした。

#### つながりのヒント



(公財)周南市ふるさと振興財団理事  
船崎 美智子 さん

この協働は一回限りではなく、できれば今後ずっと継続していく形にしたいと考えていました。周南ちるちあネットは市民活動団体としてセンターに登録されていたので、センターから今回の協働について広く発信し、今後いろいろな団体の協働の参考にしてもらえればいいなと思いました。

### ① 周南ちるちあネット

周南地域の子ども食堂が所属する「周南ちるちあネット」という団体があることは、いろいろとところからお話を聞いて知っていました。

今回の協働は1つの子ども食堂につなげるよりも、たくさんの子ども食堂がつながっているネットワークにつなげた方がよりよい解決につながると考え、この団体を協働先に決めました。

### ② 株式会社ブンシジャパン

周南市にある食品容器などの包材を扱われる会社ですので、子ども食堂で使える弁当容器などの余剰在庫をお持ちなのではないかと思ったのです。

ブンシジャパンの藤村社長さんとは商工会を通じて30年近い交流があり、お人柄や企業姿勢などを存じあげていたのでお願いもしやすかった。まずはご相談をと思いました。

頭の片隅には、今回の協働がうまくまわりはじめたら、その先ではブンシジャパンさんが持っているネットワーク、スーパーや食べもの関連の企業などとのつながりにも協働を広げていけるのではないかという思いもありました。

### ③ しゅうなん市民活動支援センター

#### つながりのヒント



しゅうなん市民活動支援センター  
事務局長  
竹内 裕光 さん

この協働は一回限りではなく、できれば今後ずっと継続していく形にしたいと考えていました。周南ちるちあネットは市民活動団体としてセンターに登録されていたので、センターから今回の協働について広く発信し、今後いろいろな団体の協働の参考にしてもらえればいいなと思いました。

### 協働への声かけ

1 センターは、株式会社ブンシジャパンに子ども食堂との協働の可能性について相談。

快諾を得る



2 センターは、周南ちるちあネットの代表を務める原田氏に、周南地域の子ども食堂で使用する包材についてブンシジャパンさんとの協働ができないかを打診

快諾を得る



3 協働の継続と展開を見越して、市民活動支援センターもこの協働に関わっていくことを決める

快諾を得る

#### つながりコメント



株式会社ブンシジャパン  
代表取締役  
藤村 周介 さん

お声がけいただいたのは、弊社で余剰在庫となっている容器を周南地域の子ども食堂のネットワーク団体へ寄付して有効活用していただくのはどうだろうか、というお話でした。会社としても無理のない範囲でご協力できるだろうと思い、即断でOKです、と。

弊社では循環型社会の構築のため、企業の務めとしてできるだけ余剰在庫、いわゆるデッドストックを作らないように努めていますし、納品先にもできるだけ使い切ってくださいようお願いしています。しかし、原材料や内容量の変更といった容器の使用先の事情や食品表示法の変更などやむを得ない事情により、どうしてもデッドストックというのは出てきてしまう。

それらをずっと置いてはおけないので、年に1回、使われなくなった包装資材をトラック1杯分くらい、廃棄プラスチックとして処分してもらうために北九州まで運んでいるのですが、廃棄しようとしていたものが有効活用していただけたら、環境負荷の軽減に寄与できます。

今回のお話はコスト的にもSDGsの観点からも、弊社にとってありがたいことだと思いました。

#### つながりコメント



周南ちるちあネット  
事務局長  
原田 宗隆 さん

もし余剰在庫となっている包材を無償でご提供いただけるのであれば、助かる子ども食堂はたくさんある。本当にありがたいお話だと思いました。

「誰かのなくてもよいが、誰かのなくてはならない」に活用できる、そういう形での協働ができれば、それが一番いいことではないかと思いました。

藤村社長とは青年会議所シニアクラブで一緒させてもらっていましたが、顔見知り程度のおつきあいで包装資材を扱う会社という以外は深くは知らなかった。今回の声かけがなかったらブンシジャパンさんとの協働は生まれなかった、ありがたいご縁だなと。

#### つながりのヒント



周南ちるちあネットさんと、これまでもセンターの主催イベントにブース出展いただくなどの協力関係がありましたし、(公財)周南市ふるさと振興財団も子ども食堂への食材の寄付などを通じてつながりがありました。

ブンシジャパンさんについては、イベント用包材の購入先として伺っていたので包材の会社さんということを知ってはいたのですが、直接的なつながりはありませんでした。

理事からその2つをつなぐ協働を始めてはどうかと聞いた時は、団体と企業の協働についてはまだ未開拓でしたが、今回の協働はその貴重な機会になるので、私たちがもしっかり関わらせていただこうと思いました。

## 協働のステップ

協働の声かけをした理事の仲立ちで、協働をする株式会社ブンシジャパンと周南ちるちあネットが顔合わせをし、周南市市民活動支援センターを交えた三者間で具体的な協働内容を話し合う場を設けた。

### Step 1 相手のことを知り 協働できるポイントを探る

2025年11月

株式会社ブンシジャパン、周南ちるちあネット、しゅうなん市民活動支援センター。三者会議。



#### つながりコメント



株式会社ブンシジャパン  
代表取締役  
藤村 周介 さん

お声がけいただきまで、周南ちるちあネットさんや子ども食堂の活動のことをよく知らなかったのです。どのくらいの規模で活動されているのかも全く知らなかった。

だから、いざ提供するとなると、子ども食堂でどんな容器がどのくらい必要なのが具体的にわからなかった。弁当容器にもいろいろな形がありますからね。蓋付きでないと困るのか、幕の内型と井型のどちらがいいのか、サイズはどのくらいがいいのか…。せっかく提供しても実際に現場で使えないと、むしろ迷惑になりますからね。

本当にお役にたてるものを提供するには、まずは周南ちるちあネットの原田さんから話を聞いてからだ、と思いました。

#### つながりコメント



周南ちるちあネット  
事務局長  
原田 宗隆 さん

いろいろと細やかなご配慮いただきありがたい限りです。

今、周南ちるちあネットには40ほどの団体が所属していて、おおむね月に20箇所くらい周南地域内で子ども食堂が開かれています。開催は月1回という団体がほとんどですが、多いところだと月4回とかもあります。

提供する食事の数も食堂ごとにバラバラで、数十食のところもあれば400から500食というところもあります。

我々としては、ご提供いただけるのであればどんな型のものでありがたい。容器の型に特に希望はありません。

周南ちるちあネットに所属する子ども食堂は運営がそれぞれバラバラなので、作る料理もメニューも数もバラバラ。だから、どんな容器でも適した活用先があるのです。

周南ちるちあネット立ち上げの経緯やわたしたちが目指している子ども食堂について少し紹介させていただくと…。

立ち上げのきっかけは、2019年に私が子ども食堂を立ち上げた時の会議で出た話なのです。「今日食べるものがない、本当に困っている子が来るとしたら、今日1日、月に1回だけ食事を提供することはいいことなのか。1日3食でひと月90食必要なのに、その90分の1で済ませていいのか、という議論になりまして…。

だったら、「今日はうちの食堂だけど明日はあそこでやるよ。明後日はまた違うあそこに行けばいいよ」って言えるように他の食堂とつながったらどうだろうか。

つながればお互いボランティアで協力できるし、食材などの物資も融通できるじゃないかと。

それで当時周南地域で子ども食堂をやっていた5箇所くらいに連絡を入れて、1回集まって話しをして、じゃあつながってネットワークを作ってやっていこうってことになったのです。それから子ども食堂を始めたい人を広げたり、立ち上げを支援したりしながらどんどんネットワークを広げていって、今は40団体が所属する団体になり、子ども食堂を通して地域の交流の場づくりだったり学習支援とか障害者支援をしたりしています。

行政に相談に行くのはなかなかハードルが高いけど、ごはんを食べに来るっていうのは来やすいでしょ。ごはん食べたところで、ポロッと困りごとをお話しされることがある。地域の人たちを食を通して支えいくというのが我々の大切な役割のひとつです。

でも、子ども食堂って結局素人が食事提供をする集まりなので、お困りごとを伺ったら解決のためのつなぎ先が必要。だから普段から行政とか社協、介護、福祉、医療の団体とつながるようにしていて、そうしたところにつなぐようにしています。最近は運営スタッフにそうした方々が入ってきているので、今はワンストップで支援できる形をつくっていかようとしています。

## Step2 協働前に心配事を解決する

### つながりてコメント



株式会社ブンシジャパン 代表取締役  
藤村 周介 さん

話を伺って、周南ちるちあネットさんの活動は想像を超える規模だし、大切な役割を担っていらっしゃることもわかりました。

うちが提供するのはいくら在庫があるので、容器の型がバラバラなら数量もバラバラ。20個の時があれば100個の時もある。これと同じものがほしいと言われても基本的には一度きりで終わり。在庫もいつもあるとは限らないので、提供できないときもある。それで協働していくというのでも大丈夫なんでしょうか。

### つながりてコメント



周南ちるちあネット  
事務局長  
原田 宗隆 さん

もちろんです。型も数量も提供時期もバラバラで全然大丈夫。いただいた時にいただいたものを柔軟に活用していきますので。長く続けていくためにも、どうぞ無理のない範囲でお願いします。

それに、提供できる包材のデッドストックがないということは、協働先であるブンシジャパンさんの企業活動が上手くいっているってことで、素晴らしいこと。それはそれで私たちもそっけで喜ぶたい(笑)

## Step3 話し合いから新たな協働のアイデアが生まれる

### つながりてコメント



食品容器というのは、今や私たちの生活に欠かせないもので逆にないと困るのですが、ゴミとか環境の問題の中ではやり玉に挙げられることが多い。でも、ゴミとして捨てずにきちんと分別してリサイクルにまわしてもらえれば、SDGs、循環社会の中で回っていく資源になります。

できればこども食堂に来る子どもたちに、持って帰った弁当容器はリサイクルにまわしてね、と伝えてもらえるとうれしいですね。

### つながりてコメント



うちの子ども食堂では、毎回体験学習をいれているのですよ。食育講座とか生け花とかお茶とかいろいろ。

その体験学習の場に藤村さんに来ていただいて、リサイクルをテーマにお話をさせていただけるといいですね。包材を取り扱う当事者からのお話であれば、市役所や先生から聞く話とはまた違う視点での話になるので、子どもたちに循環型社会について学んでもらえるよい機会になると思います。お願いします。

## Step4 協働の現場の声を聞く。現場を見る

2025年12月5日

周南ちるちあネット第17回交流会に参加

周南ちるちあネットでは、所属団体が一堂に会して講演会やグループワーク、助成金などの情報提供などを行う交流会を年に3回開催している。交流会には、所属団体のほか行政、社会福祉協議会、福祉団体、寄付をいただく協力団体など周南地域のこども食堂の運営に関わる多様な団体が参加。団体同士のつながりづくりや情報交換を行うよき場となっている。

周南ちるちあネットの原田さんがこの交流会への参加を、株式会社ブンシジャパンとしゅうなん市民活動支援センターに提案。両者快諾し、参加となる。



### つながりてコメント



良い機会なので、交流会には会社にあるデッドストックの容器を持参して、必要とされるこども食堂の方に持って帰っていただくことにしました。

包材の提供で助かる食堂があると伺ってはいましたが、実際に皆さんがお礼をいながら次々に持って帰られる様子を見ていて、こんなに喜んでいただける協働を始めてよかったなあと思いました。持参した容器は、本当にあっという間にはけました。

### つながりてコメント



全員が集まる会なので、今回の協働について紹介するよい機会ですし、グループワークに参加していただければ、ブンシジャパンさんや市民活動支援センターさんにこども食堂を運営している皆さんの声を直接聞いていただく良い機会にもなると思います、お誘いしました。

### つながりてのヒント



しゅうなん市民活動支援センター  
事務局長  
竹内 裕光 さん

今回の協働に関わらせていただいたことで、周南ちるちあネットさんの交流会に初めて参加しました。地域のこども食堂の関係者とこれから関わりを深めていくためのよいきっかけになりました。

2025年12月18日

## 「あったかごはん福川 ふくちゃん食堂」視察

ブンシジャパンから提供された容器が実際にどのように使われているかを見ていただくこと、原田さんの案内で「あったかごはん福川 ふくちゃん食堂」を視察。当日のメニューは唐揚げ弁当。4人のスタッフが午後4時からの提供に向け、午前10時から調理を行う様子を見学した。



### つながりてコメント



周南ちるちあネット  
事務局長  
原田 宗隆 さん

この食堂は2か月に1回、100食から120食を作って全部テイクアウトで提供しています。



### つながりてコメント



株式会社ブンシジャパン  
代表取締役  
藤村 周介 さん

ずらっと並んだ弁当容器を見て、確かに毎回だと包材調達の費用は負担になるだろうと感じましたし、調理されているスタッフさんの動きを見て「希望の型というはないが、作る品数が少なくて済む仕切りが少なくてコンパクトなもの、カレー皿のように2つに別れているものなどが現場では使い勝手がいい」と原田さんが言われていたことにも得心がきました。

提供した容器がどんなふうに使われているかを見ることができてよかったです。

## 協働が始まって・・・

### 株式会社ブンシジャパン

代表取締役 藤村周介 さん

協働が始まって、まずは社内で情報共有をと社員全員に周南ちるちあネットさんとの協働の取り組みについての話をして、できる協力をしてほしいとよびかけました。

今後は、弊社の取引先にも余剰在庫になっている容器を無償提供していただけるよう協力をお願いして、回収できるようになればよいと考えています。

弊社の営業が取引先で協力を呼びかけ、先方から協力の申し出があったら余剰在庫となっている容器を持ち帰る。ある程度まとまった数になった時点で、周南ちるちあネットさんにお渡しする。そんな形で協働の輪を広げていきたいと考えています。

この動きは、口頭でお願いするだけではなかなか上手くいかないでしょうから、先方に渡せる資料、協働内容を紹介して協力を呼びかける資料をすでに作りました。営業には、取引先にそれを持参させるつもりです。

さらにその先のことも考えています。

余剰在庫の提供をお願いする過程で、こども食堂の活動についても知ってもらい、企業からフードバンクへの食材の寄付につながったり、デッドストックの容器だけでなく、企業では不要になっているけどこども食堂では有効活用されそうなもの、例えば社員食堂で使われていた食器なども考えられますが、そういったつながりをつくっていきなるといいなと思っています。

### 周南ちるちあネット

事務局長 原田宗隆 さん

協働といっても、こちらは本当にいただくばかりなので何をお返ししているのやら…。なにかしらお返しできることを考えながらやっていきたいですが、まずはこども食堂として地域に還元するということが一つのお返しになるのではないかと考えています。ブンシジャパンさんからお話がいったように、いろいろなところとつながっていきながらこの協働が長く続けていければいいなと思っています。

### 株式会社ブンシジャパン

代表取締役 藤村周介 さん

私どもへのお返しなどと考えなくていいですよ。こちらで余っているものを提供しているだけなので。周南ちるちあネットさんがやられていることの方が、はるかに地域のためになっていると思います。

どこまで続けられるかわかりませんが、本当にやれる範囲でやれる時にやっていきたいと思っています

### しゅうなん市民活動支援センター

船崎さんには財団の理事として普段からいろいろとセンターの運営にご協力いただいているのですが、今回また私たちには思いもよらない、今までにない新しいアプローチで協働を手がけていただいて感謝しています。今後の協働推進の取り組みのよい参考になりました。

市民活動の支援をしっかりと行っていくには、やっぱりアンテナをしっかりと張っていないといけないと感じました。課題となっている企業とのつながりづくり、地域支援に必要とされる傾聴や質問のスキルを磨いて、今後さらに協働の取り組みを進めていきたいです。

参加する人も、運営する人も楽しめる地域貢献イベントを協働で創る

ボランティアギルド(大学生) × 吉見地区まちづくり協議会 × 学校



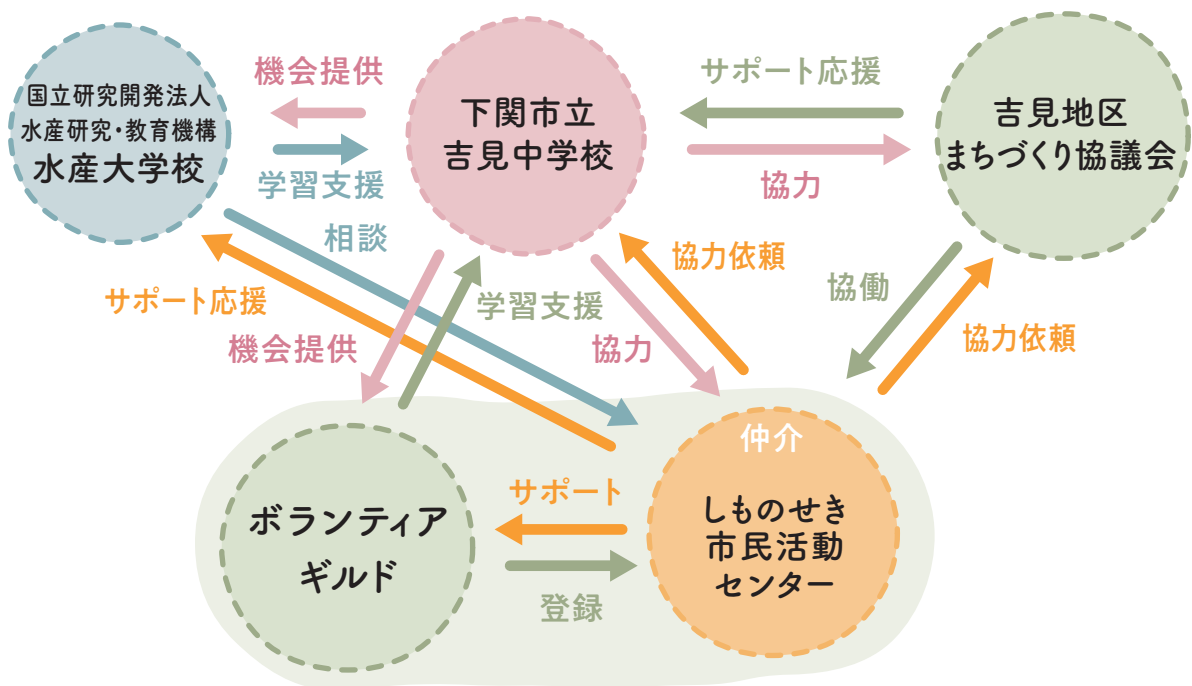
協働の概要

しものせき市民活動センターとセンターが運営する制度「ボランティアギルド」に登録している大学生、市内のまちづくり協議会、中学校とがつながって、協働で地域貢献イベントを企画し実施した。

しものせき市民活動センター

NPO法人やボランティア団体、個人などによる公益的な市民活動や地域活動、企業のCSR活動を総合的に支援する市民活動の拠点施設として、平成19年5月に下関駅前に開設。市民活動に関する情報の収集・共有・発信、市民のふれあいの場としての施設管理および活用促進、市民・団体・行政・企業・学校等とのネットワークを構築などを行って、市民活動の活性化を図っている。

登録団体:247団体(2026年3月現在)



ボランティアギルド

「ボランティアを求めている人」と「ボランティアをしたい人」をつなぐため、しものせき市民活動センターが運営している制度。ボランティア募集の情報およびボランティアに参加するギルドのメンバーを常時募集・登録し、ギルドメンバーへさまざまなボランティア募集情報をメールで通知している。また、ひとりでも安心してボランティア活動に参加できるようサポートしている。

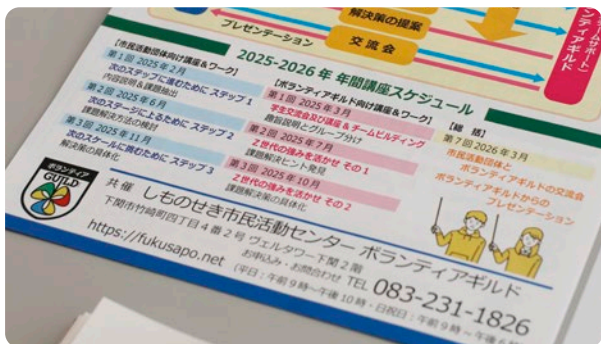
吉見地区まちづくり協議会

「まちづくり」「安全・健康・教育」「イベント」「吉母」「蓋井島」の5部会が活動し、吉見地区のつながりを深めるための環境整備、イベント・文化交流・防災の啓発活動、他地区との交流などを行ってよりよいまちづくりを目指している。地域の人口は5,300人あまり。

## きっかけ

2024年3月14日

下関市より、当センターの「ボランティアギルド」に登録している大学生と地域とで何か新しいイベントができないかと相談がある。



## つながりのヒント



しものせき  
市民活動センター  
センター長  
佐藤 百合壽さん

市からは、今まで自治会などでやってきたような祭などではなく、従来にないイベントのようなものを新しく起こしてほしいという要望がありました。そこで、ギルドの学生と市内のまちづくり協議会との協働で何かイベントができればいいのではないかと考えました。

これまではギルドの学生のボランティア活動への参加という、ギルドにオーダーが入る、例えばイベントやお祭りの学生ボランティアは補助が中心で、活動に主体的に関わるといって機会が少ないように感じていました。

私は、「ボランティアは無償の労働力の提供」とされることに疑問を持っています。学生がボランティアに来てしんどかったら、もう2回目は絶対ないですからね。だから、学生たちとやる協働のイベントは、無償のお手伝いという意識にならないよう、学祭のノリのようになるべく楽しくワイワイできるような形にしたいと思いました。

## つながり先・つなぐ視点

センターでは、ボランティアギルドの中から協働に参加する学生とまちづくり協議会をそれぞれどういう視点で選ぶのかを考える。

### ① ボランティアギルド

ギルドには、当時80名ほどの大学生が登録していました。それだけの人数がいると、登録している学生のボランティア経験値やボランティアへの関心度はまちまちです。学生が主体となって行う今回の協働は、全員に一斉メールで呼びかけるのではなく、まずはうちのセンターのボランティア活動に参加した経験を持つ大学生にしっかり話をした方がいいのではないかと考えました。

できれば自分一人で参加しますという学生ではなく、周囲にも声をかけて仲間を集めて参加してくれるような学生の方が協働にはいいのではないかと考えました。

### ② まちづくり協議会

下関市内には17のまちづくり協議会がありますが、そのいずれかに学生との協働をもちかけるのであれば、市民活動に関心の高いところがいいだろうと考えました。

そこで、当センターが主催するステップアップセミナーを受講していたり、市民活動関連のイベントに積極的に参加・協力しているような人がいるまちづくり協議会に声をかけることにしました。

## 協働への声かけ

### ① ボランティアギルドの学生への声かけ

2024年3月30日 他大学交流ミーティングの開催

まちづくり協議会との協働について声かけする場として、センターのボランティア活動に参加した経験を持つ大学生を集めた他大学交流会を開催。そこで、ボランティアギルドの学生とまちづくり協議会との協働について学生たちに投げかけてみることにした。

## つながりのヒント



交流会には、下関市立大学と梅光学院大学の学生が30名ほど参加してくれました。

「4月から学生とまちの中でいろいろ楽しいことをやりたい。自分たちでやりたいことのアイディアがあったら何でもいいから出してみて」と投げかけ、イベント企画のミーティングをしてもらいました。

「七夕飾りを作って子どもたちと遊びたい」「星空を見たい」「キャンプファイヤーがしたい」「学校に泊まりたい」等々、学生たちからはたくさんの面白いアイデアが出てきました。

センターとしては安全に問題がないかぎり学生たちから出てきたやりたいことに「No」は言わず、実現するためのサポートをしっかりとしていこうと腹をくくり、交流会に参加した大学生の中から選んだ14名を中心に据えた「チームボランティア」を結成し、協働へ向けての具体的な活動内容を検討していきました。

## ② 吉見地区まちづくり協議会への声かけ

### つなぎでのヒント

センターでは下関市吉見地区で2024年に開催予定だった「本州四端学生会議」へボランティアギルドの学生たちを参加させたいと考え、準備を進めていた。その準備の一環で、学生たちに吉見地区を事前に視察させたく、吉見地区まちづくり協議会に協力をお願いする。



しものせき  
市民活動センター  
センター長

佐藤 百合壽 さん

「本州四端学生会議」は、本州の四端にあたる青森、岩手、和歌山、下関の各地で4年に1回開かれている会議で、2024年は本州最西端の地・毘沙ノ鼻がある下関市吉見地区で開催される予定でした。

ボランティアで参加する学生達には会場となる吉見地区について事前に見て知っていてもらったほうがいいと考え、地元詳しい吉見地区まちづくり協議会に協力をお願いしました。

快諾を得る

## 協働のステップ

### Step 1 2024年4月20日 吉見地区の視察と協議

大学生7名とセンター職員3名が、吉見地区まちづくり協議会吉母部会2名と一緒に地区内を車で視察。その後、吉母公民館で意見交換の場を持ち、双方の要望を伝えあった。

### つなぎでのヒント



視察と意見交換会の両方ができたことで、学生とまちづくり協議会さんとのつながりがとてもよい機会となりました。



本州の最西端の地「毘沙ノ鼻」

### 吉見地区まちづくり協議会

ボランティアに貢献したいという願いを持って視察に参加した大学生から、「綺麗な景色に圧倒された」「地域の皆さんの温かさ、熱意を感じてそれに応えられるような活動を行っていききたい」「過疎化を課題として、活性化につながる企画を実行していきたい」などの感想をもらってとても頼もしく思いました。

### Step 2 2024年4月下旬 協働を予定していたイベント 「本州四端学生会議」が中止に

### つなぎでのヒント



吉見地区の視察の直後、諸事情により本州四端学生会議が中止になりました。しかし、今回せっかくできた大学生と吉見地区のまちづくり協議会さんのつながりを無駄にはしたくはありませんでした。

学生たちから出た協働のアイデアの中には、「学校に行っても子どもたちと遊びたい」「アクティビティをやってみよう」「勉強を教えたい。学習支援がしたい」「学校に泊まりたい」というものが結構ありました。

そこで、そちらの方向でなんとか協働が実現できないものかと吉見のまちづくり協議会の吉母部会 清田会長さんに相談を持ちかけました。

「わかった!わしが聞いてやる」と引き受けてくださった吉母部会 清田会長さんのルートで吉見中学校の校長先生につながり、学生たちがやりたいことを話す機会を得ました。



## 2024年4月20日 まちづくり協議会の仲立ちで 中学校を訪問

吉見地区まちづくり協議会 越智事務局長の骨折りにより吉見中学校とつながったことで、内容を中学校での学習支援という形に変えて協働が継続できることとなる。

### つながりでのヒント



しものせき  
市民活動センター  
センター長  
佐藤百合壽さん

まちづくり協議会の会長さんと一緒に学校に伺い、校長先生と教頭先生に学生たちのアイデアを伝えると、「面白い。協力しましょう」とすぐにご快諾いただきました。

学校側とスケジュール調整し、イベント実施は8月の夏休み期間中。サマースクールという形で学習支援とアクティビティを実施することになりました。

### つながりてコメント



下関市立吉見中学校  
校長  
柴崎 誠司さん

吉見地区のまちづくり協議会さんには、普段から学校も生徒もいろいろとお世話になっています。その会長さんから「一度会って、話を聞いてみてくれ」という依頼だったので、とりあえず詳しい話を聞いてみようと思いました。

お話を聞くと、「大学生がボランティアで、中学生を対象にしたアクティビティや学習支援をする」「イベント企画と実施計画書は大学生が作り、市民活動センターとまちづくり協議会がそれをサポートをする」「学校側には、場所の提供と生徒への呼びかけ以外には負担はかけない」ということだったので、生徒たちのためになることでこちらに新たな負担が発生しないのであれば断る理由はないなど。

ボランティアに来てくれるのが教育学部の学生たちとも伺ったので、協力することで将来教員を目指す彼らの力になれたらいいなという思いもありました。



## Step 3 2024年4月下旬 実施に向けての打ち合わせ

センターとまちづくり協議会、学校の三者協議で中学生への学習支援をメインにしたサマースクールの開催が決定。イベントの大枠が決まった段階で、活動の中心となる大学生たちをつれて吉見中学校を訪問し、四者でイベント実施に向けた協議を重ねた。

### つながりでのヒント



協働のイベントを企画し実施運営することは学生にすべて任せ、センターやまちづくり協議会、学校などの大人側は、学生のプランが安全に実施できるよう「箱(会場)」や「シチュエーション(環境)」を整えることに注力する、という役割分担で進めていきました。

学生を連れての事前打ち合わせは、2回。

初回は、活動の中心となる学生3人を連れて学校に行き、校長先生、教頭先生、まちづくり協議会の会長さんと面談。今回の協働でどんなアクティビティをしたいと考えているのかを彼らに語ってもらいました。

2回目は、初回の協議を受け学生たちが作ったイベントの実施計画書とスケジュール案を持参して、学校とまちづくり協議会さんと実施にむけての最終打ち合わせをしました。



Step4 2024年8月8日～9日

「吉見中学校 サマースクール」実施

サマースクールには、2日間で吉見中学校1、2年生16名が参加。運営側は、ボランティアギルドの大学生8名、吉見地区まちづくり協議会吉母部会2名、センター3名、学校からは教頭先生が参加となった。

大学生たちは、8月8日の午後と9日の午前中を使って学習支援とアクティビティを実施。日程の最後はその様子を記録したビデオの鑑賞会。参加した中学生も運営した大学生も大満足のうちに2日間のサマースクールは終了した。

つながりでのヒント



しものせき  
市民活動センター  
センター長

佐藤百合壽さん

センターはイベントの大枠だけを作って、後は学生を信頼して任せました。企画から準備、当日運営、後片付けまで自分たちでどんどんやってくれました。

学生たちは、自分たちで作った企画とスケジュールをもとにイベント当日の運営を全面的に実施。

学校には、場所の提供とサマースクールの告知と生徒の募集を依頼しました。

まちづくり協議会さんには、視察への協力以外に、会場づくりや当日必要となるものを事前に用意していただくなどの側面サポートをお願いしました。

今回協働した大学生は教育学部生。学習支援はもちろんのこと、子どもたちとのアクティビティについても専門的に学んできたことを上手に実践してくれました。大学生も中学生も、ワーキー言いながら和気あいあいと。2日間を楽しく過ごし、「また来年もするぞ!」と。え? 来年も??

つながりコメント



下関市立吉見中学校  
校長  
柴崎 誠司さん

学校としてやったことは、サマースクールがあるよというチラシを作ってご家庭に配り、希望者を募って申し込んでもらうというくらい。先生方に負担をかけるようなことが何もなく助かりました。

小学生と違って中学生には意外と夏休み中のイベントがないのです。そんな中、大学生が「中学生のために」って一生懸命考えていろいろ作ってくれたので、子どもたちはとても喜んでいましたし楽しんでいました。秋の文化祭でこの時の記録映像を流してまた楽しそうに見ていましたからね。楽しい夏の思い出としてきっとずっと覚えているでしょうね、子どもたちも大学生も。

Step5 2025年4月

吉見まちづくり協議会と吉見中学校からセンターに2025年サマースクール開催の依頼

2025年春。中学校とまちづくり協議会からセンターに「今年もサマースクールをやりたい」旨の電話が入る。これを受け、センターは2025年もボランティアギルドの学生たちによるサマースクールの開催を決定。吉見中学校を訪問し、実施に向けた三者打ち合わせを行い、参加するギルドの学生の募集を始める。

つながりでのヒント



実は、私の中では1地区1協働イベントと思っていたのですが…。

柴崎校長とまちづくり協議会の吉母部会 清田会長の2人から「今年もやってくれるよね」と言われれば、2024年に大変お世話になった身としては、もう答えは「イエス」しかない…。リクエストされるくらい喜んでいただけたということで本当にありがたい話なのですけどね。

ただ、2日間の実施は大変だったので、2025年は1日でやることにしました。

ギルドに、「今年もまた吉見でやります」と声をかけたところ、これしたい、あれしたい、面白そうとまたいろいろアイデアを持つ学生たちが集まってくれました。

Step6 2025年4月～7月

学生と学校、まちづくり協議会の打ち合わせ

つながりでのヒント



今回は、実施までに打ち合わせ会議を4回持ちました。

学生から「みんなで一緒に食べる昼食はそうめん流しにしたい」というリクエストがあり、2025年はサマースクール当日にまちづくり協議会の方々にいろいろとお手伝いいただくことになりました。

Step 7

2025年8月8日  
「サマースクール in 吉見中学校」  
実施

2025年のサマースクールは、吉見小学校6年生12名と吉見中学校1、2年生18名が参加。運営側は、ボランティアギルドの大学生8名、吉見地区まちづくり協議会吉母部会7名、小・中学校から教職員数名が参加となった。

2025年は1日のみの実施で午前9:30スタート、15:30終了。学習支援、小中学生交流会、アクティビティ、そうめん流しの昼食会、記録ビデオの鑑賞会などのプログラムを実施。2024年同様小中学生が楽しんだのはもちろん、運営を担った大学生、会場準備から運営まで幅広くサポートしたまちづくり協議会、小・中学校も満足のいく協働イベントとなった。



つながりでのヒント



しものせき  
市民活動センター  
センター長

佐藤 百合壽さん

小学6年生と中学1、2年生でサマースクールをやるというのは、大学生のアイデアです。「来年同じ学校になる子どもたちに、仲良くなる機会を作ってあげたい」と。「大学生なかなかやるじゃん。すごくいい企画やね」とサポート側の大人たちは感心しきり。初参加となる小学校も、こちらからの声かけに即座にご快諾いただきました。

「昼食はそうめん流しをしたいって学生が言いよるけど…」と吉母部会 清田会長に相談。「よし分かった」とまちづくり協議会の方々が竹を切り出してきて、それを半割にして筋交いをつけ、15m長さのものを2本作ってくださった。

まちづくり協議会の方々は、子どもたちが勉強をしている間に、そうめん流しの竹を校庭にセットし、大鍋で大量のそうめんを茹で、そうめん流しの準備を着々と進行。勉強終わった子どもたちが外に出てきた時には全部できあがっていて、「さあ、食べるぞ!」。子どもたちは歓声を上げて大喜び。運営側も全部混じったワイワイと楽しい昼食会になりました。

大学生の狙い通り、今年のサマースクールも楽しい夏の思い出になったんじゃないかと思います。



協働がきっかけで次々とつながりが…

サマースクールへの参加をきっかけに吉見地区とつながりができた梅光学院大学の学生の卒業研究に吉見の小学校と中学校の子どもたちが協力し、絵画を制作。その絵画が吉見近隣公園に設置されることになった。



つながりでのヒント



これをきっかけに今、吉見をアートのまちにしようという、まちづくり協議会さんが中心になって地域の皆さんにたくさん絵を描いてもらって貼り出していくような動きが出ているようです。ギルドの学生たちとまちづくり協議会さんが頑張ったサマースクールが、地域おこしにつながった。嬉しいです。

吉見中学校では、水産大学校に依頼して学習支援に来ている水産大学校の学生を家庭科の授業に招き、中学生たちに魚をさばき方を教えてもらうといった取り組みも始まっている。

つながりてコメント



下関市立吉見中学校  
校長  
柴崎 誠司さん

学習支援をきっかけに水産大学校とつながったので、教頭先生が先方をお願いに行ったのです。水産大学だから彼らは魚の捌き方なども専門的に学んでいるのですね。そのスキルを活かしてぜひ子どもたちにも教えてほしい、と。授業では見事に捌いてくれて、子どもも先生も大絶賛。捌き方のコツも上手に教えてくれました。

水産大学校はうちの学校と近いのでこれからもいろいろな形につながっていけるといいなと思っています。子どもたちの将来の進路志望の参考にもなるので、そのうち学校見学などもさせてもらえたらいいねと先生たちとも話しています。

## 新たな困りごと その解決につながる 協働のはじまり

### つなぎでのヒント



しものせき市民活動センター  
センター長  
佐藤 百合壽 さん

実は、吉見中学校のサマースクールで2年に渡って運営を担っていたギルドの大学生のほとんどが4年生。2026年春には大学を卒業し、ほとんどの学生が就職で下関を離れます。となると、2026年のサマースクールはどうなるのか。新しく担い手になってくれる大学生が集まるだろうかと懸念していました。

### 協働のステップ

#### Step 1 2025年10月14日

#### 水産大学校でのボランティア説明会で 学生とつながりが生まれる

県からセンターに、「水産大学校でボランティアに興味のある学生が集まるのでそこで話をしてほしい」という依頼が寄せられる。佐藤センター長が水産大学を訪れ、学生12人を前に自分たちの活動について話をした。

### つなぎでのヒント



こども食堂に興味のある学生がいると聞いたので、市内のこども食堂2団体にも声をかけ、一緒に行って活動の話をしてもらいました。

水産大学校は吉見地区にあり、吉見中学校とは徒歩で10分もかからないくらい近い距離にあります。良い機会だと捉え、吉見中学校でのサマースクールの話をしたら9人の学生がセンターの活動に興味を持ってくれました。

その学生たちと今後も続くつながりを持ちたいと思い、2年生の女子学生一人にリーダーになってもらって連絡先を交換しました。

実は、カリキュラムの関係(後述※1)で水産大学校の学生はボランティアギルドに登録がないのです。センターでは、何とか水産大学校とつながりを作ることができないかとずっと模索していましたので、今回の講師依頼は願ったりかなったりでした。

#### Step 2 2025年10月

#### 水産大学校生を吉見中学校へつなぐ

センターは、吉見中学校に水産大学校生によるボランティアの学習支援の受け入れが可能かを打診。快諾を得た上で、ボランティア説明会でつながりのできた水産大学校の学生2名を連れて吉見中学校を訪問する。どんな形で実施するのかについて、学生、学校、センターの三者で話し合う。

### つなぎでのヒント



両者をつないだのには、「サマースクールの新たな担い手の開拓」というセンターとしての困りごととは別にもうひとつ、吉見中学校の困りごとの解決にもつながるという思いもありました。

水産大学校では実習船に乗って長期間海洋実習を行うカリキュラムがあるため、コロナ禍以降、リスク排除のため学生たちの外部との接触を厳しく制限していました。(※1)

その影響で、元々あった吉見中学校と水産大学校との交流がコロナ禍で途絶えてしまった。中学校側はコロナ禍後に水産大学校との交流を再開したいと考えていたものの、そのきっかけが掴めず困っておられた。

今回水産大学校に伺って、学生の外部接触のルールが学習支援ボランティアの障壁にならないレベルになっていることが確認できたので、両者をつなげば交流が復活する良い機会になるだろうと思いました。



#### Step 3 2025年11月 新たな困りごとの解決につながる 協働がスタート

三者での話し合いの結果、水産大学校生が吉見中学校を訪問し、学習支援やクラブ活動の補助のボランティアを行うことに。水産大学校生の学校訪問は不定期で、その都度事前連絡を入れ、学生と学校とで活動の可否を確認し、両者ともに無理のない範囲で実施していくことが決まった。

### つなぎでのヒント



不定期での訪問にしたいというのは学生側からの要望です。「定期訪問は負担が大きすぎる。無理なく活動を続けていくためには、行ける時に行くというスタイルにさせてほしい」と。学校側も学生の事情を慮り、不定期訪問を了承。両者でうまく調整できているようで、活動は順調に続いています。

この活動はもう大丈夫だと思えたので、センターとしては手を離し、今は全面的に学生と学校に任せています。もちろん何かあればサポートはしますけれど。

2026年は、学習支援に来ている水産大学校の学生たちを中心メンバーにして吉見中学校でのサマースクールを実施していけたらいいなと考えています。センターとしては、まちづくり協議会さんと協働で学生のやりたいことをしっかりサポートしていくことは変わりません。

## 協働を終えて・・・

### しものせき市民活動センター

センター長 佐藤 百合壽さん

市民活動している団体などがよく「若い人の力を借りたい」と言われますが、私は必ず「期待しないでください」とお伝えすることにしています。2世代の目線で何かヒントがもらえるかもしれない。でも若者の力や発想ですぐに、例えばまちおこしできたり何かが活性化することはない。若者からヒントはもらっても実際にやるのは皆さん、皆さんが頑張らなきゃ活動は続かない。若者に頑張ってくれと丸投げではだめだとお伝えしています。

若者を市民活動に巻き込む時、まず若者にやりたいことを言わせて、こちらでできることを仕分けしてやって、予算やできる手法を考えてあげることがコツのひとつだと思っています。私は若者がやりたいと言ってきたことに基本危険なこと以外はNOと言わない方針ですが、それでも大人としてまず取捨選択をし、彼らを信頼して「自分たちのできる範囲でね」と言ってやりたいことをやらせています。丸投げはしない。吉見中学校のサマースクールもそうして進めてきた。だからこそ、協働に関わるみんなが喜んで楽しく活動できて、次につながっていているのだと思っています。

ボランティアに来た若者にしんどい思いはさせたくない。2回目が絶対なくなるから。センターの活動に行ったら面白かった、遊びに行く感覚でボランティアに来たら地域のためになった。そういう経験が若い時にできたら、将来のまちや人のために動ける人になると思っています。



### 吉見地区まちづくり協議会吉母部会

会長 清田 幸男さん

まずは、「しものせき市民活動センター」「ボランティアギルド(大学生)」に感謝致します。

協働で地域貢献イベントで何かできないかと相談を受けました。「やろう!この地区は、高齢化が進み人口も減少していく中で地域の活性化になる。全面的に協力する」旨伝えスタート。

学生さん達の斬新的なアイデアをもとに取り組んだ結果、参加した皆さんに喜んで頂いたと、私は強く感じています。

この取り組みは継続して行くことが大切で、地域の人が一人数多く参加することで「地域の活性化が図れる」と思っています。

### 下関市立吉見中学校

校長 柴崎 誠司さん

普段からよく学校に来ていただいていた信頼関係のある吉見地区まちづくり協議会さんの紹介でサマースクールをやって、その時に知り合った市民活動センターさんとの縁で水産大学の学生たちの学習指導とクラブ活動の補助が始まって。学校としては来てもらうだけなのですが、ありがたいことに縁が次々とつながっていています。

教員志望の大学生たちにとって、今回のサマースクールは、地域の方も学校経営に関わっていること、学校と地域とが一緒になって子どもたちのためにいろいろやっていることを知ってもらうよい機会になったのではと思っています。教育実習ではそんなところは分かりませんからね。今、教員不足ですから、こうした形で子どもたちと接して、楽しい経験をして「やっぱり先生になりたい」と思ってくれたら嬉しいです。

### ボランティアギルド

大学生 斎藤 倅夏さん

私は、吉見中学校での学習支援に2年間携わってきました。初めて実施した際にその楽しさを実感し、「より魅力ある活動にした」という思いから継続して取り組んできました。外部の大学生が関わることで、子どもたちだけでなく地域の方々にも新たな刺激が生まれると感じ、現在もその思いが次の世代へ引き継がれていることを嬉しく思っています。

また、吉見・吉母地域のアートによる地域活性化に触れたことをきっかけに、「自分の力でも地域を明るくしたい」と考えるようになり、学習支援で出会った子どもたちとともに絵画制作にも取り組みました。

さらに、地域の方々との出会いも大きな学びとなりました。清田さんや越智さん(吉見地区まちづくり協議会 事務局長)とは市民活動センターの紹介で出会い、意見交換を重ねる中で、多くの気づきを得ることができました。

活動を通して、地域の方々の強い思いや努力に触れ、卒業研究も多くの支えの中で成し遂げることができたと感じています。今後は、幅広い世代が協力し合い、より明るい地域へと発展していくことを願っています。

これらの経験から、継続力や忍耐力の大切さを学びました。この学びを糧に、4月から新社会人として前向きに歩んでいきたいと思えます。

## さまざまなアプローチでつながりを創り広げる

### 学生・若者・子育て世代・企業×市民活動団体



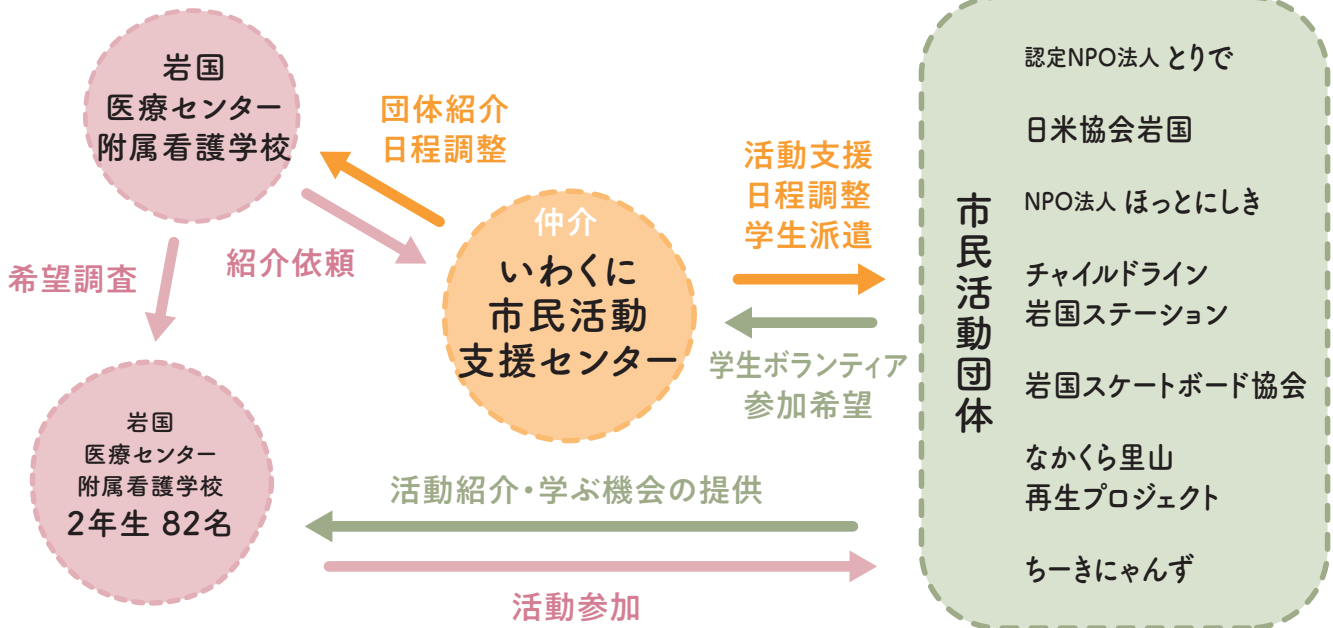
#### 協働の概要

いわくに市民活動支援センターでは、さまざまな手法を用いて若い世代の市民活動への参加、市民活動団体とのつながりづくりを促進する取り組みを進めている。その手法を紹介する。

#### いわくに市民活動支援センター

市民による自主的・主体的な社会貢献活動を支援し、市民と行政の協働による新しいまちづくりを進めていくため、市民活動団体の設立やネットワークづくりの支援、活動交流の場の提供、情報の収集と発信などのサービス、市民参画のしくみづくり、コミュニティ活動やボランティア活動を充実させるための講座の開催、相談などを行っている。年6回発行している情報誌「ささえ」では、登録団体を紹介したり、助成金情報などを発信している。

登録団体：121団体(2026年3月現在)



#### 認定NPO法人 とりで

社会的養護を必要とする子どもたちや地域の家庭に対して、相談・支援を行うことで児童家庭福祉・地域福祉に寄与することを目的に設立。岩国市を中心に「地域が子育てを支える」という理念のもと、地域での子育て支援、こどもの貧困対策に取り組んでいる。こども食堂や無料の学習支援塾などさまざまな活動でこども居場所づくりに取り組む。

#### どっとこみゅ

人と人とのつながりの創出を通してさまざまな社会課題の解決を図り、地域住民に交流や行動の機会などを提供することにより、快適で住みよいまちづくりに寄与することを目的に設立。コミュニティスペースの設立・運営、イベントの企画などを通して、社会的孤立や社会課題、地域課題、個人課題の解決に取り組んでいる。

#### 独立行政法人国立病院機構 岩国医療センター附属看護学校

旧国立岩国病院に併設される看護婦養成所として昭和21年に誕生。看護の基本理念でもある生命尊重と人間愛を基盤に、保健・医療チームの一員としての責任と役割を担う実践力のある看護者の育成を目指している。卒業生は、国立病院機構をはじめさまざまな機関で市民の健康と暮らしを支え、社会に貢献している。

## CASE 1 プレゼンでつなぐ 市民活動団体 × 看護学校生

センターが市民活動団体と看護学校の学生とをつなぎ、学生は団体の活動に参加する場を得て、団体は学生が「地域で暮らす人を支える仕組み」を学ぶ機会を提供して協働する。

### きっかけ

#### 看護学校からの依頼

将来看護師となる学生たちが社会に出た時に役に立つように、地域について学ぶ機会を求めていた看護学校が市民活動支援センターに相談を持ちかける。

### つなぎでのヒント



いわくに  
市民活動支援センター  
事務局長  
柳原 文子 さん

看護学校の学生が地域で「生きる」ことや「暮らす」ことを支えている実態について学ぶ機会を求めているのだが、協力してもらえないか。できれば授業で学生を地域の団体の活動に参加させたいと考えている…というお話でした。

### つなぎ先・つなぐ視点

#### 市民活動団体について知ってもらう 学生の現状を知る



### つなぎでのヒント



看護学校でお話をうかがいながら、まずは市民活動団体がどんなことをしているか、ボランティア活動とはどういったものかというのを学生さんが知らない、団体の活動に参加させることはできないと思いました。

また、団体を紹介する側のセンターも、学生さんたちがボランティアや市民活動についてどれだけの知識があり、どんな団体に興味を持ち、どんな活動に参加したいと思っているのかが分かっていないと、団体につなぐことはできないなと思いました。

一方、団体側の学生との連携のニーズについては、それぞれの活動を見たり普段の付き合いの中で意向を確認したりして把握していましたので、その中で医療系の学生が地域を学ぶのに適した活動をしている団体、医療福祉系やまちづくり系の活動をしているところに声をかけて、つなぎ先になってもらおうと考えました。

これらの課題を解決するため、看護学校の学生との連携を希望する市民活動団体には学生たちに向けて活動内容のプレゼンをしてもらうこと、看護学校の学生にはボランティアや市民活動に関するアンケートに協力してもらうことを決めました。

### どうやってつないだの？

#### 団体が活動内容をプレゼンし、学生が選ぶ

センターは、看護学校の授業で市民活動団体に活動内容のプレゼンをしてもらう場を設け、ワークショップを行って学生たちにボランティア活動や市民活動団体について学んでもらうこととした。

### つなぎでのヒント



連携希望のあった団体に看護学校でのプレゼンを呼びかけたところ、初年度は4団体が参加してくれました。

看護学校の学生には、ボランティアに関することと、団体のプレゼンをきいてどんな感想をもったかというアンケートに協力してもらい、アンケート集計をもとにした振り返りのワークショップもしました。

#### 令和5年度

#### 市民活動団体のプレゼン・交流会・ワークショップ・アンケート実施





協働2年目となる令和6年度以降は、学生たちが実際に団体の活動に参加。学生が参加する活動内容については、団体と学校(学生)の間で直接協議してもらい、センターは学生側の希望に沿って人数や日程の調整など側面サポートの役割を担う体制を整えた。



- Step 1** 学生の受け入れ希望がある団体に活動内容のプレゼンを行ってもらう
- Step 2** 団体のプレゼン後、学生は自分が参加したい団体の活動を選ぶ  
学校は学生の希望を取りまとめ、センターに連絡
- Step 3** センターは学生の希望を団体に取り次ぎ、受け入れ日程や人数等を調整
- Step 4** 団体との合意内容をセンターから学校に連絡
- Step 5** 学校が学生を団体の活動に参加させる



令和6年度  
市民活動団体のプレゼン(7団体)・ワークショップ・団体の活動に学生が参加(2年生82人)



令和7年度  
市民活動団体のプレゼン(6団体)・ワークショップ・団体の活動に学生が参加(2年生58人)

つながりのヒント



学校から学生の希望を聞き、団体に「何人いきますから、お願いします」と取り次ぎ、団体との調整が完了したら学校側に連絡を入れます。5月~11月の授業期間中に学生全員を受け入れてもらえるよう各団体と調整する必要があったので、参加希望が多いところは調整が大変でした。

つながった成果は？

学生に地域を支える活動を知ってもらうよい機会に

つながりのヒント



地域で活動している団体の取り組みを地元の学生たちに知ってもらうことができ良かったです。学生たちの個人的なボランティア活動につながったのもよかったです。

学生は最初に団体のプレゼンを聞いて、自分で選んだ活動に参加できるので、様子を見に行くとほとんどの学生たちが楽しそうに参加していました。

市民活動団体は、看護学校の学生が活動に参加してくれて若い人と交流を持つことができ、活動が活性化したのではないのでしょうか。

つながりコメント



認定NPO法人とりで自立支援担当職員  
山崎 智子 さん

看護学校の学生を受け入れた団体

こども食堂をやっていますので、その中で子どもたちとちょっと遊んだり勉強したりする時間があり、その時に学生さんたちについてもらえるとありがたいなと思い、センターさんからの声かけがあったときに受け入れを決めました。

看護学校に行って私たちの活動を知ってもらうためのプレゼンをし、多くの看護学校の学生さんに活動に参加していただきました。学生さんとのつながりができてよかったです。

今回の看護学校の取り組みがきっかけで、その後プライベートでボランティアに来てくれている看護学校の学生さんもいます。よい経験になったみたいで嬉しく思っています。

団体の活動に参加した看護学校の学生

小さなことでも積み重ねていくことで大きな活動となり、地域のためになっていくことが分かりました。

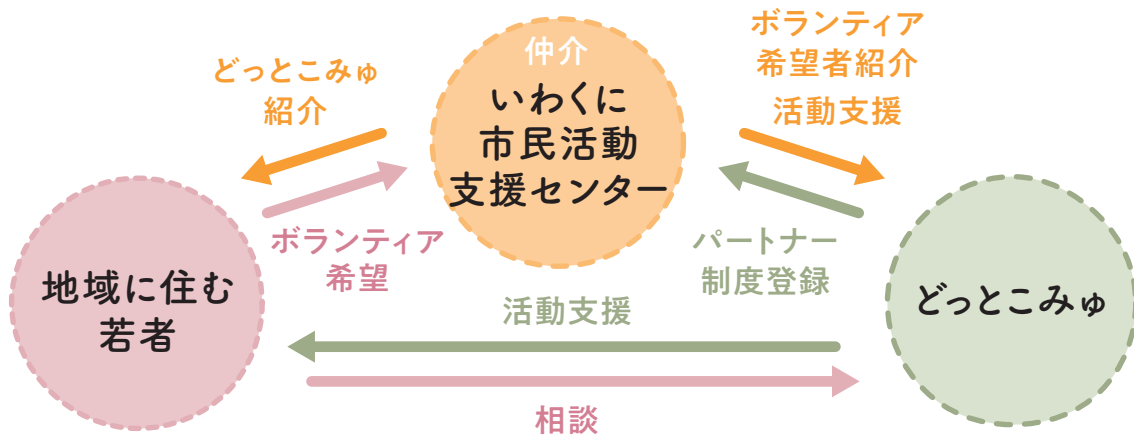
ボランティアは規模の大きいことだけでなく、挨拶やゴミ拾いなどの小さなことからでも参加できるものを知ることができました。

たくさんの団体が地域で活動していることがわかり、地域の暮らしを支えている仕組みが理解できました。

## CASE 2 水先案内人でつなぐ

### 市民活動団体 × ボランティア活動がしたい若者

若者の居場所づくりをしている市民活動団体とセンターがパートナー制度で協働し、ボランティア希望の若者を団体につなぐ。



#### きっかけ

ボランティアしたくて来所した若者たちの声



#### つなぎでのヒント



いわくに市民活動支援センター事務局長  
柳原 文子 さん

うちのセンターはフジグランという商業施設の中という立地のメリットもあり、表に掲示している各種ボランティアの募集情報を見かけて、ありがたいことに通りがかりの地域住民や若者がふらっと立ち寄ってくれることが結構あります。

その時によく聞くのが、「ボランティアをしたいと思っても情報がない」「岩国のどこに行ったらあるのか分からない」という声です。

#### つなぎ先・つなぐ視点

パートナー制度を活用する

市民活動パートナー制度(※1)とは

ボランティアに参加してみたいと考えている団体、学校、企業、個人を「市民活動パートナー」として登録し、自分たちの活動に参加してほしいと考えているセンター登録団体をつなげ、協働のきっかけづくりを行い、団体や地域の課題解決を支援する制度

#### つなぎでのヒント



日常の業務として、ボランティアの問い合わせに対応し、団体につなぐ「ボランティアマッチング」を行っているのですが、残念ながらそういった情報が市民に十分届いているとはいえません。

本来なら、そういった若者たちの居場所をつくるというのがこのセンターの役割なのかもしれませんが、現状ではそれが難しい状況です。

であれば、市民活動パートナー制度(※1)に登録している「どっとこみゅ」という市民活動団体が今まさに若者の居場所づくりに取り組んでおられるので、そこと協力して取り組むのが課題解決の一番の早道かな、と考えました。

#### つながりてコメント



どっとこみゅ代表  
谷光 純弥 さん

メインでやっているのは無料自習塾での学習支援で、分かりやすいので塾という名称にしていますが、目的は成績を上げるのではなく、子どもたちに勉強できる場を提供すること。

空き家を活用していて、空いているスペースもあるので、そこをコミュニティスペースとして開放しているのです。そこに来れば、誰でも自然発生的につながりが生まれますよ、というところにしたくて。



## どうやってつないだの？

### 団体に若者をつなぎ、新たなつながりを創る

「どっとこみゅ」は、地域の交流拠点としてコミュニティハウスF+A(フラット)を開設し、若者が気軽に集える居場所づくりに取り組んでいた。センターは「どっとこみゅ」と話し合い、若い人からボランティア希望の問い合わせがあった場合は、すぐに「どっとこみゅ」につながることとなった。

センターから若者の紹介を受けた「どっとこみゅ」では、若者の話を聞いたり相談にのってどんな活動をしていきたいのかをひも解き、今後の活動内容を一緒に考えたり、適切な団体へつなげたりすることに。

#### つなぎでのヒント



いわくに市民活動  
支援センター  
事務局長  
柳原 文子 さん

コミュニティハウスF+A(フラット)には「人と人がつながる場所」として若者が集い、岩国地域のボランティアや市民活動に関する情報が得られる場所となりつつありました。

ボランティア希望の若者をコミュニティハウスF+A(フラット)に紹介し、そこで話を聞いてもらって、希望の活動ができるようにどこかの団体や活動につなげてもらえたらいいなと考えました。

#### つながりてコメント



どっとこみゅ  
代表  
谷光 純弥 さん

センターさんとは、「ボランティア希望の若い人が来たら、一旦全員こっちに回してください」という話をしているのです。

相談に来られる方は、具体的に何かやりたいことを持っていたり、仲間がいてもう動きだせませんという方ばかりではなく、個人でボランティアを希望して来られる方には「具体的に何をやりたいのかはまだないけれど、何かやってみたい」というような形で来られる方が多いのです。

何かやりたいという形で相談に来られても、センターではなかなか応えられないこともあると思います。

こちらにつないでもらえたら、その人の話を聞いて、自分たちの活動だけでなく、私たちとつながりのあるさまざまな活動をしている人たちにつないであげることができます。

令和6年度は、若者円卓会議「夢を語ろう会議」を4回実施。岩国の未来や自分たちの未来について語りあった。



令和7年度は、若者の居場所づくりにつながる活動として、まちづくりワークショップ「人とのつながりで“くらす”を楽しむ」と題した講演会と座談会をコミュニティハウスF+A(フラット)にて、「つながるひろがる 子育て応援フェス～地域の子育て支援を未来へ～」を市民活動支援センターにて開催した。

## つながった成果は？

### 人と人がつながる場所が生まれる

令和6年度は、センター主催の若者円卓会議「夢を語ろう会議」をコミュニティハウスF+A(フラット)で4回実施。若者が集い、岩国の未来や自分たちの未来について語りあった。令和7年度は、若者の居場所づくりにつながる活動として、まちづくりワークショップ「人とのつながりで“くらす”を楽しむ」と題した講演会と座談会をコミュニティハウスF+A(フラット)にて開催。また、子育て支援のイベント「つながるひろがる 子育て応援フェス～地域の子育て支援を未来へ～」を「どっとこみゅ」の主催で市民活動支援センターにて開催した。

#### つながりてコメント



「夢を語ろう会議」には、若者だけでなく、心理カウンセラーやこども食堂、広瀬分校の活用を考える会、難病の会、薬剤師、外国の方、たこ焼き屋を起業した人等々、本当にいろいろな大人が参加したのです。「どっとこみゅ」の会員さんのつながりで。

若者たちは自分たちの夢を語れて良かった、参加したプロフェッショナルな大人に将来の進路の相談ができてよかった、と。なかなかそんな大人の話聞く機会はないですね。これからは役立ついろいろなつながりもできたようです。

#### つなぎでのヒント



ボランティアをしたいとセンターに来所した若者を「どっとこみゅ」に紹介したのは、述べ19人。若者の市民活動への参画につながってくれたらいいです。

#### つながりてコメント



この協働では、センターさんには市民活動団体「どっとこみゅ」を紹介してもらっているのではなく、場を紹介してもらっているって感じです。ボランティアをしたくてもまだ仲間がいないとか何をやりたいか決まっていない人たちが、そこに行けば人に会えてつながっていくと

いう場所が岩国にはありませんでした。誰もが気軽に行けて、人と人が自然発生的につながれる場所というのがなかなかないので、コミュニティハウスF+A(フラット)は若者が気軽に来れる居場所としてセンターさんと一緒にやっていたらと思っています。

## CASE 3 アンケートでつなぐ 市民活動団体 × 企業

### きっかけ

企業から寄せられた声

### つなぎ先・つなぐ視点

協働の第一歩はお互いを知ることから

### どうやってつないだの？

アンケート調査でニーズを明らかにする

センターは、企業側がボランティアや市民活動団体との協働にどのようなニーズを持っているのかを明らかにするため、岩国市内の企業350社に社会貢献活動・市民活動団体との協働に関するアンケートを送付。協力を依頼する。

企業向けアンケートの概要

- 実施期間／2024年9月27日～10月28日
- 回答数／書面69件、Googleフォーム44件
- 回収率／32.3%

### つながった成果は？

見える化できた協働のマッチング

アンケートを実施したことで、企業側のニーズが見える化でき、協働に向けての情報を企業と団体とが共有することができた。

#### つなぎでのヒント



いわくに市民活動  
支援センター  
事務局長  
柳原 文子 さん

企業側からセンターに寄せられる相談の中に、「CSRや市民活動団体との協働に取り組もうとしても活動団体の情報がないのでできない」という声が多かったのです。

市民活動団体側からは企業に向け、「マンパワーを支援してほしい」「資金源を支援してほしい」という要望が常に上がっていましたが、果たしてそれは企業が求めている協働内容と一致するのかなという疑問がありました。

#### つなぎでのヒント



協働を目指すのであれば、企業も団体も自分が求めるところと相手が求めるところをお互い共有していないと、つながることはできません。

例えば、団体側が資金面での支援を求めているも、企業側がマンパワーの支援はできるが資金面の支援は厳しいと考えていたら、協働はできません。

そこで、まずは企業にも団体にも、それぞれが求めていることを知ってもらうために、アンケート調査をしようと考えました。

#### つなぎでのヒント



企業にアンケートを送付する際に、岩国地域にどのような市民活動団体があるのかを知っていただくためにセンターの登録団体の情報が載った冊子を同封しました。

また、アンケート調査に協力いただいた企業に結果を送付する際にも、協働事業実施のためのマニュアルや市民活動団体と企業との協働の事例、センター登録団体一覧などを掲載した『協働連携事業ガイドブック』を同封し、協働につながる情報を提供しました。

#### つなぎでのヒント



アンケートは、企業側に「ないのでできない」と言われていた団体に関する情報を提供できたよい機会となったと思っています。

団体側には、アンケート結果を見ていただくことで、企業とのつながり方は必ずしも資金面だけでなく、マンパワーだったり、場所や機会の提供だったり、資源はいろいろな形を取り得ることが分かっていただけではないかと思っています。

企業にも団体にもアンケート結果をよく読んでいただき、どんな形であつたら相互に負担が少なく協働できるか、自分たちはどこまでマッチングできるかを探っていたらいいなと考えています。

アンケートが今後、企業と団体との協働に役立てばと期待しています。

## CASE 4 出会いの場をつなぐ

### 市民活動 × 高校生ボランティア ・子育て世代

いわくに市民活動支援センターが年に一度開催する「市民活動カフェ」。岩国で活動する団体と市民との交流の場となっているこのイベントには、30を越える団体が参加し、来場者は1500人を越える。センターでは「市民活動カフェ」が、若者と地元の市民活動との出会いの場となって新たなつながりができるよう、集客方法に工夫を凝らしている。

#### きっかけ

登録団体の高齢化

#### つなぎでのヒント



いわくに市民活動支援センター  
事務局長  
柳原 文子 さん

センターの登録団体がだんだん高齢化しています。活動をやめようとしているところも出てきているのです。実際、若い世代の団体は全登録団体の2割くらいしかありません。これは若い人を巻き込んで次世代につないでいかないと、活動する団体がなくなってしまうという懸念があります。

#### つなぎ先・つなぐ視点

若い世代に興味を持ってもらえる企画



#### つなぎでのヒント



幅広い世代の市民が来場する「市民活動カフェ」は、若者を市民活動に呼び込む絶好の機会と捉え、若い世代の集客につながる催し物を、飽きられないように毎年何かしら変えながら企画しています。

子育て世代の集客につながるのには、子どもが喜ぶ、子どもが集まる催し物。子どもが「行きたい」となると、親御さんも必ずお越しになりますから(笑)

ちなみに、2026年のカフェで新しく取り入れたのは、TV局のアナウンサーによる絵本の読み聞かせとシールラリーで、どちらも大好評でした。

#### どうやってつないだの？

市民活動フェアに来て、見て、参加して、知ってもらう

#### ① 高校生ボランティアの参加

##### つなぎでのヒント



カフェ開催前に岩国市内の全高校にアポイントをとって、ボランティア募集のチラシを持参し、参加を呼びかけてもらうようお願いして回っています。

毎年10人前後、多い時で20人ほどの高校生ボランティアが参加して、ブース出展する団体の手伝いや会場運営などに携わってくれています。

高校生は、普段の暮らしの中で市民活動団体とつながる機会はありませんので、カフェでのボランティアがその貴重な機会になればいいと思います。

#### ② 子育て世代の集客につながるイベント「おもちゃ広場」

「おもちゃ広場」は形を変えながら2026年で16回目の開催。毎回整理券を配るほどの人気でリピーターも少なくありません。

広場で使うおもちゃは、寄付で集まったもの。市報とセンターのHPで寄付を呼びかけたほか、保育園・幼稚園・小学校、公共施設などに寄付と来場を呼びかけるチラシを配布しました。2026年は118個のおもちゃが集まり、78個を配布しました。残ったおもちゃは全て児童福祉施設に寄付しています。

来場した子どもたちは寄付されたおもちゃで自由に遊び、帰る時に子ども1人1個ずつ好きなおもちゃを持ち帰ることができます。

おもちゃが受け継がれるので、SDGsの観点からも意義のある活動と思っています。

### ③ 団体ブースをたくさん回ってもらえる「シールラリー」

来場者にできるだけ多くの団体との交流をもってほしくて、2026年のカフェでは団体のブースを巡るシールラリー抽選会を実施しました。

ラリー参加者は、団体ブースに掲示してある「Mission(指令)」を体験後、シールを1枚獲得。10ブースを巡って10枚シールを集めたら抽選会に参加でき、引いたくじの景品をもらえるというもの。

多くの参加があり、特にファミリー層や親子連れの参加が目立ちました。想定以上に若い世代の集客に効果がありました。また、これまで立ち寄りが少ないブースにも人の流れが生まれ、いろいろな市民活動団体の活動について知ってもらえる良い機会になったと思います。



### つながった成果は?

どんどんつながる。

高校生×団体、市民×団体、団体×団体。

#### つながりのヒント



いわくに市民活動支援センター  
事務局長  
柳原文子さん

高校生ボランティアには、「ボランティアでいい経験できたな」「市民活動カフェ、楽しかったな」「新しい人と知り合えた」などの思い出をつくってもらえたらいいなど。

岩国で活動している人や団体とのつながりができたり、ボランティアがいい思い出になったら、将来またボランティアしたいと思ったり岩国で市民活動に参加してみようかなと思ってもらえるんじゃないかと考えています。

「おもちゃ広場」は、子育て世代の啓発にと継続実施しています。今は子育てで忙しく活動が難しくても、将来的に余裕ができたときに何かにつながる可能性があります。子育て世代がこれをきっかけに市民活動に興味を持ってくれたらと願っています。

また、「シールラリー」の参加者からは、「見るだけでなく参加型だったのがよかった」「いろんな団体があって面白かった」という感想をいただきました。団体からは、「シールラリーのおかげで若者男女いろんな人がブースにきてくれた」「体験型だったので来場者とやりとりして交流できた」という声がありました。来場者、参加団体ともに好評で、ラリーに多く参加していた若い世代と交流がうまれるよいきっかけになったと思います。

参加団体からは、「他の団体と交流できた」「いつも出会うことのない団体と話げできた」という声も聞かれました。カフェでの出会いや交流が、活動内容や世代が異なるため普段交流のない団体同士に、新しい協働のきっかけを与える効果も出ています。

カフェで体験したいろいろな交流やつながりが、若い人たちが将来市民活動に参加することにつながってくると嬉しいです。

### つながりをつくる時に大切にしていること

いわくに市民活動支援センター

事務局長 柳原文子さん



私が大切にしているのは、まず現場現場で相手をよく見る、ということです。相手が何を求めているのか、相手の表情や反応を見ながら会話して探っていきます。大事なのは、自分がこうしたいではなく、相手がどうしたいのか、を見極めること。それが人や団体をうまくつないだり、つながりを広げていくコツといえどコツかもしれません。

また、市民活動団体とは日常的にコミュニケーションをとって、活動の様子や困りごとなどを把握するように努めています。ボランティアの受け入れについても、受け入れ可能か否か、どんなニーズがあってどんな人を求めているのかなどを折りにふれ聞いています。そういった情報は、ボランティア希望の人を適切な団体につなぐために欠かせないと思います。



古賀 桃子 / 特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター 代表

1975年福岡市生。学生時分まちづくりNPOを経て、2002年に現組織を設立。[草の根から、社会を描く。]を合言葉に、企業・行政・公民館・社会福祉協議会・児童館等の橋渡しや伴走支援を通じた、地域づくり・社会づくりの黒子に注力。近年は、防災や災害時の後方支援、大学での講義、テレビ局の報道番組レギュラーコメンテーター等も歴任。併せて「泡盛新聞」九州局長および「泡盛検定協会」会長として、沖縄県の産業振興にも注力。2024年4月より北九州市立大学大学院マネジメント研究科(専門職大学院/ビジネススクール)教授に着任。NPOと大学を両輪としながら人財育成や各種取り組みの支援に勤しむ。

## 【長門市】 団体 × 行政 × 学生 × 企業 協働の事例について

多様な主体と協議を重ねながら一つの取り組みを形作る協働の醍醐味が表れています。特に複数の企業の巻き込みは色々と苦勞もあったことと思いますが、「防災」というテーマの特性上、企業にとっては意義・メリットが小さくなく社内でも提案を通しやすい側面があるでしょう。スタート当初から複数の企業との連携を図ったことで、今後もさらなる輪の広がりが期待できそうですし、こちら福岡県内の災害時の後方支援活動においても経験したのですが、こうした日常のつながりが「今後、災害ボランティアセンターを立ち上げられるようなことがあれば」の言葉通り、いざという時には大きな力になるはずです。

一種重たいテーマでもありますので、「市民活動フェスティバル」をはじめ関連の活動は楽しみながら展開していかれたら、関係者間の意欲や一体感の継続にも繋がると考えられます。

## 【周南市】 団体 × 企業 協働の事例について

子ども食堂と企業との協働といえば、食材やレシピの提供、開催場所や資機材の貸し出しなどといった例が主である中、食品関連パッケージ製造を本業とする企業と接点が出来たことで、継続的な取り組みにつながっていることが際立っています。また、企業側のSDGsに関するモチベーションも高いだけに、社長の言葉にもある通り、子どもたちには間接的に分別リサイクル意識の醸成効果も期待できます。他方、在庫品を提供されているとのことで、社長の言葉を借りれば、「やれる範囲」がリアルタイムでどれぐらいなのか、相互に確認しながら無理のない範囲で続けていかれたらと思います。あわよくば子ども食堂向けオリジナルパッケージ商品も開発され、全国に流通を・・・という期待も抱かせるような、前向きな取り組みです。

## 【下関市】 団体 × ボランティア × 学校 協働の事例について

「学生 × 地域」をコンセプトとした取り組みは各所で見られるようになっていますが、この取り組みは特定の大学ではなく複数の大学に呼びかけており、学生にとっては、教育機関の垣根を超えた相互交流やガクチカ(学生時代に力を入れた活動として就職活動などで活かせるエピソード作り)のメリットも得られる機会になっていると推察します。また、コーディネイトに従事するセンターの関係者自らも楽しみながら取り組んでおり、それが長続きの源泉にもなっているのではないのでしょうか。さらには地区の近隣にある水産大学校と中学校とのマッチングにも至っており、こうした芋づる式に展開する協働の取り組みは、更なる継続や発展につながるものと期待します。あとは他の地区にこの熱量がうまく飛び火する仕掛けも創意工夫で考えたいところですね。

## 【岩国市】 団体 × 学生・若者・子育て世代・企業 協働の事例について

ケース1について、近年医療系の教育機関が、臨床での実習以外に地域課題を身近に学べる実習機会を求めるようになってきている中、本事例は、学生のニーズに寄り添った丁寧な取り組みの積み重ねが感じられます。センターが仲介していることが、学校側の安心材料やいざという時の対応にも寄与するでしょう。

ケース2について、「不特定多数の若者」をターゲットとするとても難しい事業ですが、豊富な経験を有するNPOが中心的な役割を担う形をとることで、多面的なつながりを生み、若者においてきっとワクワク感が増幅する形になったものと映ります。

ケース3について、市民活動団体が国内で活躍するようになって30年近く経つ今もなお、企業関係者からは「どんな団体がどこで活動しているかわからない」という声が聞かれる中、アンケートという形で、改めて腰を据えて情報の流通に取り組んでいることは意義深いでしょう。

ケース4について、高校生がさまざまな場面で活躍するようになっていますが、まだボランティアとは疎遠な潜在層も一定数います。そのような中、事前に全ての高校を訪問した上で参加促進を図っている点、学校側も安心して送り出せますし、高校生が楽しめる企画ありきでの募集方法も奏功しているでしょう。子ども向けの「シールラリー」は他のセンターでも活用できそうなキャッチーな仕掛けですね。

事務局長の言葉にある「相手を見る(見極める)」は協働の取り組みに限らず、常々大切ですが、殊に異質な相手と同じ目的の下で一緒に取り組むとなると、なおさら五感を働かせるぐらいの姿勢が大切だと思います。いずれも、これが根底にあってこそ花開いた取り組みではないでしょうか。ケース3にある「企業との協働」をこれからどう展開するか、興味深いところです。



## まとめのコメント

いずれの事例も、すでにある資源(人材、場所、広報ネットワーク、知恵など)を活かさんとする意欲的な取り組みばかりで、関わる企業の業種やテーマ立てから、それぞれの地域性も伺えました。

何かと先読みし難い中、こうした取り組みを進める極意は、地域で「自分ごと」して捉えてくれるような仲間を各セクターに増やすことにあると考えます。このための「つなぎて」としての留意点として、以下3つを提案します。

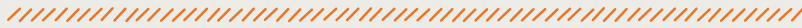
- お金がかからない形で楽しさを増幅させる策(資金管理の事務に要する人員・時間を最小限に)
- 離陸支援のタイミングの見極め(つなぎて側も十分な人員体制でない場合も)
- リスクヘッジの手立てを関係者とともに協議(天候不順、資金不足などの不安定要素対策)

常に場を開き、小さいところから楽しい成功体験を重ねることを意識していくことで、きっと皆さんが目論む方向でのチャレンジングな取り組みが形になると思います。「楽しみながら」をモットーに、進めていけたらいいですね。



## 本紙作成にあたっての参考文献・資料

- 認定特定非営利活動法人日本NPOセンター、  
特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター  
『くらし×〇〇 つなぎの手帖』 2019年
- 徳田太郎・鈴木まり子  
『ソーシャル・ファシリテーション「ともに社会をつくる関係」を育む技法』  
北樹出版、2021年



## 付 録

本紙は、山口県「協働ネットワーク強化による県民活動促進事業」の一環で作成したのですが、一部本紙の情報も盛り込みつつ、同事業の様々な取組みを通して収集した協働（ファシリテーション）のノウハウを整理して紹介・共有する研修も開催しました。その研修で用いたテキスト資料を付録としてお示しいたします。下掲の2次元バーコードからご覧ください。



2025年10月9日開催

### 日々の業務「+α」で協働を促す

(主催:山口県 企画運営:特定非営利活動法人やまぐち県民ネット21)

<https://blog.canpan.info/yamanet21/archive/87>



### 協働ファシリテーションの検討ワークシート (PDF)

<https://x.gd/msu4V>





発行 令和8年(2026年)3月

発行

山口県 環境生活部 県民生活課 県民活動推進班

〒753-8501 山口県山口市滝町1番1号

Tel:083-933-2614 Fax:083-933-2629

企画編集

特定非営利活動法人やまぐち県民ネット21

〒753-0091 山口県山口市天花1町目11-21 ストークハイツ201号

Tel:083-921-2437